『比較民俗研究』17. 2000／3

ガンマドヴァと山伏神楽を中心に
――祭礼の継承に関する比較研究――

J. A. ナンダナジャヤコディ※

目次

はじめに
Ⅰ　歴史的展開
Ⅱ　ガンマドヴァと山伏神楽－その異同と性格
Ⅲ　ガンマドヴァと山伏神楽に対する人々の関わり
Ⅳ　伝承に関わる問題
おわりに

初めに

一見したところ現在の社会変化につれて伝統文化は消滅しつつあるのではないかと思われる。いつの時代にも社会の変化と共にそれが担う文化も変容し，あるいは消滅していることはいうまでもない。しかし，先祖代々から伝わってきた伝統文化を継承しゆくことは，単に伝統的なものだから保存するという以上に重要なことではないだろうか。それは，スリランカの場合，植民地支配及びその後の近代化の過程でいわゆる伝統的なものが西洋的なものに比べて「ゴデー（gode)」（＝田舎くさい，洗練されていない）として蔑まれてきた経緯があるからである。すなわち伝統文化の消失は単に有形，無形の文化の実質的な変容・消失の問題にとどまらず，植民地支配以降のスリランカそのものの独自性の消失と結びついている。伝統文化を次の世代に伝承することは民族としてのアイデンティティを新たに構築してゆく上でも重要なことであると考えるが，この重要性に気が付いている人々の数はわずかである。

我々が継承すべき伝統文化において有形文化より無形文化の方が変容・消滅の可能性が高いのは周知の通りである。有形文化は補修などによって保存が可能であるが，無形文化は保存だけではなく伝承する必要性もあるからである。

本研究は無形文化を伝承保存することに注目したものであり，中でも伝統文化の多くの要素が含まれた民俗芸能をとりあげている。

ここでは民俗学的な方法を使用し，スリランカと日本を対象として比較研究をする。スリランカと日本を研究対象とした主な理由は，前述した「社会変化につれて伝統文化は消滅している」という事実に反して，発展途上国であるスリランカに比べて発展の著しい日本のほうが伝承保存しようとする人々の努力によって数多くの民俗芸能が残っているからである。

※筑波大学大学院地域研究研究科

この比較研究を通して科学的にも発展し，多くの娯楽もあり，スリランカに比べて多忙な生活をしているのにも関わらず，日本人が伝統文化の継承の重要性を認め，伝承保存しようとしている理由は何なのか，逆にスリランカの民俗芸能が急激に消滅している理由は何なのか，スリランカと日本は民俗芸能をどのように伝承保存しているのか，それに関わる問題は何なのかなどを検討する。それによってスリランカより社会的発展が先に進んでいると考えられる日本からスリランカの民俗芸能の伝承保存を今後進めるにあたっての手掛りを得られるのではないかと考えている。

西洋崇拝という点で日本とスリランカは共通しているが，スリランカにおいては約130年の長期間にわたる西洋人による影響が深く浸透してきた。そのため今から約100年ぐらい前からもすでに各地方の民間で伝承されてきた民俗芸能などが急激に消滅に瀕してきた。このように考えると，伝統文化に象徴されるスリランカの独自性はかなり後退していると言わざるを得ない。

しかし，スリランカでも自らの文化や芸術を守り続けていくために努力している人々もわずかだが存在する。西洋の文化より自分に近いアジアの文化を見本にできるのではないかということが彼らの意見である。特にスリランカ文化と関係のあるインドや，独自性を守り続けながら科学的にも発展している日本のようなアジアの国々は彼らの模範の対象であり，研究の対象となっている。

スリランカにおける日本の研究については，E.R. Sarachchandra氏が日本の演劇から影響を受け，スリランカの民俗芸能を基にした独自な芸術性のある演劇であるマナメを創る努力をしたことがあげられる（参考資料2）。スリランカの人々に民俗芸能の重要性を自覚させることと日本の能のような独自な芸術性の高い演劇を創ることが彼の目的だったのである。

来日してから約５年間，日本各地の民俗芸能である神楽，田楽，猿楽，能舞を調査し，スリランカにおいても細部に渡って民俗芸能の現在の形態を調査に基づき検討してきた。スリランカのガンマドヴァと日本の山伏神楽の存在状態に焦点を当てたこの研究は，スリランカの民俗芸能の保存に向けての努力である。

研究の方法

本研究は日本の山伏神楽とスリランカのガンマドヴァ（Gammaduwa）についての事例研究である。まず，山伏神楽については，岩手県大迫町内川目村の岳（たけ）と大償（おおつぐない）という集落の神楽の組織者，祈祷師，他の仕事に関わっている人々，この村§周りの村，都会から来る観客とともに生活しながら神楽と彼らの生活様式との関係を調べた。また，近代の社会変化がその関係にどのような影響を与えているのかを調査した。スリランカにおいては，ガンマドヴァが行われる地域からコロンボ（Colombo）とガンパハ(Gampaha)という県（District）を選び，ガンマドヴァの現在の存在形態とそれに関わっている社会変化と共に，どのような変化が見られるのかを調査した。神楽やガンマドヴァを行うことの背後に存在している組織の人との交流，民俗宗教との関連を調べた。

被調査者としてガンマドヴァと山伏神楽に関わっている祈祷師，観客，組織者，祈祷師兼組織

者である者という4つに分類し，面接調査を行った。日本とスリランカでは被調査者の数は60名ずつである。面接調査によって得られた情報に基づいて調査項目を作り，アンケート調査を行った。被調査者すべてに記入してもらい，数量データを収集した。

研究史

スリランカの民俗芸能に関する研究で大きな成果をあげた研究として1950年代E.R.Sarachchandra氏によって書かれた*The Folk Drama of Ceylon*（1952）があげられる。ここでは，1950年代ではスリランカに残っていた民俗芸能やその歴史的な背景，あるいは民俗芸能と年中行事の中に見られる演劇の要素について詳しく検討されている。

ガンマドヴァに関する人類学的な研究としてはGananth Obeyesekereの*The Cult Of the Goddess Pattini*（1984）があげられる。ガンマドヴァで祭られる主な女神であるパッティニ神やその信仰の由来が検討されている。また近代化の中でガンマドヴァが消えつつある形態を現地調査を通して明らかにしている。また *Social Change and the Deities:The Rise of Kataragama Cult in Modern Sri Lanka*（1982）はパッティニ神信仰は時代の変化につれて弱くなり，カタラガマ神信仰に変わりつつあることやその原因また，それと同様にガンマドヴァはどのような影響を受けたかということを検討した研究である。

ガンマドヴァにおける35の演目（パンチスコウルムラ）の歌集*Pantis kolmurakavi*（1974）は，P.B.G Hevawasamによってヤシの葉に書かれてあったものが写された。ガンマドヴァにおける35の演目に関する最も長い歴史を持つ資料から写されたといわれている。

日本の民俗芸能についての先行研究はスリランカでは今まで行われていない。もちろん日本については数多くの研究がみられるが，本研究で主に参考になったのは本田安次氏によって書かれた『山伏神楽・番楽』（1942）である。岩手の山伏神楽に関する研究の先駆者である本田安次は戦前から戦後にかけて東北の山村に入り，そこで行われてきた山伏神楽と番楽を調査し，これを比較研究した。山伏神楽と番楽にみられる共通点を明らかにするべく演目ごとに詳しく比較している。特に大迫町の内川目村の早池峰神楽に注目しているので早池峰神楽に関しても詳しい研究となっている。

コーネル大学のIrit Averbuchによって書かれた*The Gods Come Dancing*（1995）も本研究において参考になった。*The Gods Come Dancing*は山伏神楽，特に早池峰神楽に関する事例研究であり，早池峰神楽の歴史，背景，踊り，音楽，などにおいても検討している。

本田安次（1942）およびIrit Averbuch(1995)は山伏神楽の歴史的な背景や構成について詳しく検討している。Gananath Obeysekere(1984)は1950年代から70年代までのガンマドヴァの存在していた形態とガンマドヴァの構成や歴史的な背景について詳しく調べている。本研究では先行研究を踏まえ，70年代から現在までの山伏神楽とガンマドヴァの存在形態を比較することに重点をおいて検討する。

Ⅰ　歴史的展開

ガンマドヴァとスリランカの民俗宗教

現在スリランカの人口の約75%を占めるシンハラ人は一般に仏教徒であるが，民俗芸能の背景にあるのは必ずしも経典的・制度的・理念的な仏教ではない。それは，仏教が伝えられる以前からあったアニミズム的な性格と，理念的な仏教とが融合した民俗宗教として捉えることが出来るのである。しかし，一方で仏教の経典的・制度的側面は，僧侶によって伝えられてきている。

インドから伝えられた経典的・制度的な仏教やそのダルマ（仏法）の目的は，現世での欲望を満足させることではなく，来世での良い生まれ変わり，あるいは輪廻から解放されることであるとされている。したがって，僧侶の役割は一般の人々の生活から離れた寺院や森の中での禁欲的な生活や，輪廻のサイクルを止める修行をしながら，それを一般の人々に教えることである。一般の仏教徒にも，仏教の教えに従って善行をし，徳をつむことが奨励されている[i]。

しかしながら，一般の人々にとって，日常生活における宗教的な欲求を満足させるには，いわゆる「純粋な」仏教による宗教的実践行為だけではもの足りなかった。そのため，スリランカの民衆生活には，仏教的な観念や実践が融合した民俗宗教という姿が広く見うけられる。その中には，本来釈迦に関わりのない数多くの超自然的存在や，それに関わる儀礼が見られる。一般の人々は，こうした儀礼も同じ「仏教」として受け入れているのである。したがって，スリランカにおいては，民衆に受容されている民俗宗教的な仏教と，僧侶による理念的仏教が共存していると言える。

仏教にアニミズム的な性格が入り始めたのは，スリランカに伝えられる（紀元前3世紀の）前からであり，釈迦が悟りを開いたといわれる菩提樹に感謝し，祈願することもインドからもたらされた。具体的には，祖先崇拝，自然崇拝（山，樹木など），神々，ヤカ（悪魔）のようなアニミズム的なものが，仏教の目的に沿うように関連づけられて仏教の中に融合された。

紀元前3世紀にスリランカに伝えられた仏教はアニミズムの浸透していた文化的，社会的状況下で位置付けられ，アニミズム的なものは仏教的コスモロジーの中に包摂されていった。

ガンマドヴァに関係するパッティニ神信仰は仏教到来以前からあったと思われるが，そこにも仏教の影響がみられる。例えばガンマドヴァの始まりの行事であるカパヒタヴィーマというのは，ガンマドヴァを行う前に仏陀,ダルマやサンガに許可をもらう行事である。またガンマドヴァの全ての踊りを舞う前に舞手は仏陀，ダルマのサンガに許可をもらう行事を行う。

デヴィヨ（Deviyo）〔神々〕

シンハラ人の信奉する神々（デヴィヨ）は，南インドに由来するヒンドゥーの神々が仏教的な世界観のなかに包摂されたものである。　仏教の流入後，シンハラ人の信じている神々の数はさらに多くなった。17世紀では，ナータ(Natha)，ヴィシュヌ(Vishunu)，カタラガマ(Kataragama)，パッティニ(Pattini)，という神々のために作られた神社と，その神々4人を主にしたアサラ祭（仏陀の歯が置かれているとされる寺院の祭り）が有名になっていたとRobert Knoxは述べている[ii]。

19世紀になると，シンハラ人の信じている神々の数は一段と多くなった。　Obeyesekereは，こ

のように神々の数が多くなった社会的原因として，社会発展と共に人々は社会階級の高いと思われる職を希望すること，知識のある人の数が多くなっても就職が無いこと，政府は知識のある人々より仲間だけを就職に決めること，という問題を指摘している。彼によると，それらの問題を解決するために多くの人々は，神々を信じて自分の願いをかなえてもらうとしたという[10]。

スリランカの民俗宗教における神々は，前世で数多くの善行をつんだ人間の生まれ変わりで，その神々はやがて仏陀になること，あるいは輪廻から解放されることを目的としている。神々は一般に，天上の贅沢な世界に宿っているとされ，人間の顔をしており，人間とはかけ離れた美しさを持っていると思われている。四大守護神下の段階に3億3千万の神々がいると考えられている。

現在では，政治家や有名な人達も，死後神になるという傾向がみられる。K.N.O.Darmadasaはそのような242の神々の氏名と役割について調べている[11]。

ガンマドヴァに関するパッティニ神

スリランカの低地では，収穫感謝を祈る年一回の村祭りのガンマドヴァで祭られる主な神はパッティニという女神で，スリランカの農民の間では有名な神である。その信仰は，2世紀頃からスリランカに始まったと，E.W. Adikaramは述べている[12]。パッティニはドラヴィダ系の女神で，南インドのタミール人の信仰する女神に属する。19世紀になると，全国様々な地方にパッティニ神社が作られた。ガンマドヴァだけでなくプナマドヴァ(Punamaduva)，キリマドヴァ(Kirimaduva)，パハンマドヴァ(Pahanmaduva)という祭りにも，主な神はパッティニであり，特に天然痘，水疱瘡，ペストなどの病気治し，予防の神として知られ，さらに雨乞いも祈願される。その一方で，悪い行為を徹底的に糾弾するとも考えられている。

ヤカ（悪魔）

スリランカのヤカ（悪魔）というのは，サンスクリット(Sanskrit)語のヤッカという単語からきており，神々とは別の悪霊的な存在であり，神々に比べれば低位に位置付けられる。それは，人間に不幸や災いをもたらす霊的存在だと信じられている。数多くのヤカの宿っている所は，木々，森，水が流れる所，山，十字路，墓，あばら屋，人気の無い道などであり，人間がその悪霊に見入られると取り憑かれて病人になると信じられる。仏来以前は，人間の肉を食べて生活していた超自然的な力と，牙や毛むくじゃらの体を持った，非常に恐ろしい表情をしているものと考えられていた。しかし，仏来によって「ワイスラワナ(Vaishravana)」という仏教の神は，すべての「ヤカ」を統率するようになり，これによってヤカは食生活や行動を変え，釈迦の命令に従うものとなった。

人間に悪い影響を与える悪魔を満足させて追い払うための行事がスリランカの民俗宗教の中に多くみられる。それと同様に，人々はその願いを叶えてくれる神々に感謝し，楽しませるための行事も行ってきた。ガンマドヴァは，スリランカの民俗宗教における神々を祭るために行なわれる行事である。（表1）

表 1　民俗宗教におけるガンマドヴァの位置

神々（デヴィヨ）に関する行事	悪魔（ヤカ）に関する行事
ガンマドヴァ(Gammaduwa)	サンニヤクマ(Sanniyakuma)
デオルマドア(Devolmaduwa)	スーニヤムヤクマ(Suniyamyakuma)
プーナーマドア(Punamaduwa)	マハソホンサマヤマ
キリマドア(Kirimaduwa)	(Mahasohonsamayama)
パームマドア(Pahanmaduwa)	ラタヤクマ(Ratayakuma)
コホバカンカーリヤ	トヴィル(Tovil)
(Kohobakankariya)	スーニヤムケピーマ
バリ(Bali)	(Suniyamkepima)

神楽と日本の民俗宗教

組織化されなかった数多くの宗教的な習慣が地域的な差異を伴って存在するのが日本の民俗宗教ではないかと考えている。この中にある様々な性格はスリランカの民俗宗教の背景にもみられるアニミズム的な性格に共通している。日本のアニミズム的な性格は，後から伝わってきた仏教や，神道，修験道の性格と融合し，現在の日本の民俗宗教という状態になっているのではないかと考えられる。

自然崇拝には太陽，山，岩，など自然物への崇拝と共に，雨，風，雪，など人間生活に大きな影響を与える自然現象への崇拝がある。現在神楽において注目されているのは農業に関する山の神信仰，田の神信仰，水神信仰などである。

日本の自然信仰のうち富士山をはじめとする山を祭る信仰が山伏神楽と強く関わっている。山伏神楽の1つである早池峰神楽では早池峰山への信仰を中心にしている。山の近くに住む地域社会の農民の間では田の神信仰も盛んである。田の神は田仕事をする農民の作物を守り，稲の成育を助け，また豊かな実りを保証してくれると考えられている。田仕事を始めるに当たって農民達が水口に向かって水神を祭る。山伏神楽で登場する山の神，水神，海神，五穀の神などは，仏教，神道，修験道の性格というより，以前からあったアニミズム的な信仰の反映とみなすことができる。例えば，早池峰神楽では祖先崇拝への要素として死者の霊魂や歴史上の人物が主人公になった演目が演じられることなどがあげられる。また山伏神楽の黒森神楽では権現が墓参りする場面がある。(写真 1)

日本には八百万の神々が存在するという。それらの神々の中には山，水，海，火などに関する神々や人々のなりわいに大きく関する力を持つ神々も多く存在している。近代以前日本では人口の9割の人々が農業を中心にしていたので農業に関わる神々が多い。早池峰信仰に関する神々の多くもその農業に関する神々である山の神，水の神，田の神，海神などである。早池峰の山の神は，村落の人々の農業や他の生活手段に適当な天気を与え，山の上から彼らの暮らしを見守っていると村人に信じられている。又，神楽を行なう時，その場に降りてきて人間と一緒に楽しむと信じ

られている。

II　ガンマドヴァと山伏神楽－その性格と異同

ガンマドヴァという単語は，ガン（Gam）＝村，マドヴァ（Maduwa）＝一時的に作られる屋根と柱だけの建物の意味である。しかし，一般的には，一つの村やいくつかの村が集団で行う神々を祭る行事を表す言葉である。ガンマドヴァは，五穀豊穣や無病息災を願って行う行事であるが，ガンマドヴァに関する神々を中心とした物語を音楽，歌，踊り，会話などを通して演じるので，日本の神楽との類似性が認められる。ガンマドヴァでは，狂言に似たような物語や神話と関係する物語も多く見られる。主にパッティニ信仰が中心になっているので，パッティニという女神の人生に関する物語，他の神々に関する話，過去の王に関する話や昔話が演じられる。書かれた台本や資料によると，今から60年ぐらい前に，ガンマドヴァでは35の演目 Pantis kolmura 「パンチスコールムラ」（参考1）が行われたが，現在では1～2ぐらいしか行われていない。

スリランカでは，シンハラ人が住んでいるどの地域でもガンマドヴァが行われるが，ウダラタ地方（国の中央部）だけでは神々を祭るコホバカンカーリヤ（Kohoba Kankariya）という祭りがあるのでガンマドヴァはあまり行われない。しかしパッティニ神は，スリランカの西部，南部，東部など低地を中心とする各州で広く信奉され，ガンマドヴァは毎年行われている（図1）。ガンマドヴァは先祖代々から農業経済を通して伝承されてきたものであり，収穫がよかった場合，神々に感謝を表すこと，大雨や干ばつが原因で収穫がよくなかった場合，そのことを神々に知らせて次年の五穀豊穣を願うこと，原因が分からない病気を治す独自な医療手段としてまた，人々，特に子供の安全，長寿，収穫物の保存などを願うことを目的として行われている。

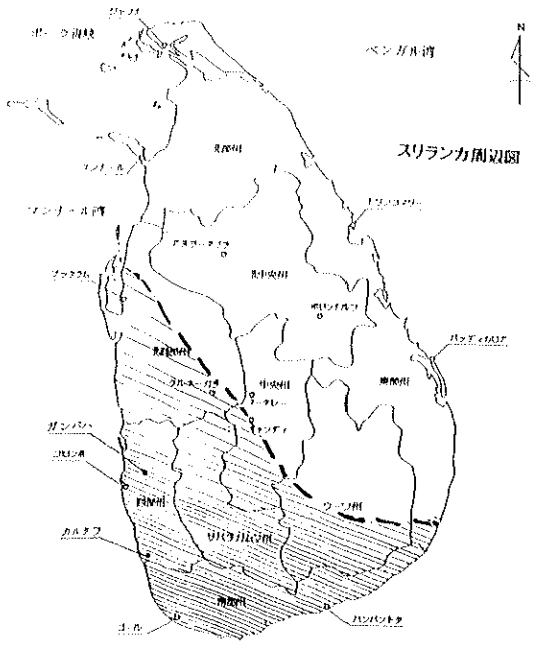
ガンマドヴァのリーダーはカプパッティニ（Kapupattini），パッティニハーミ(Pattinihami)，カプマハタ(Kapumahata)，カプラーラ(Kapurala)などと呼ばれ，人々の悲しみや喜び，願い事などを神々（特にパッティニ神に）に知らせる役割があり，ガンマドヴァの構成を決めたり，ガンマドヴァグループ内のまとめ役として村の客との交流やこの伝統を次の世代に伝承することなどに関わっている。

起源

ガンマドヴァの起源は，パッティニ神信仰と重なっている。パッティニ神は，インドのヒンド教の神である。インドのバガワットカーリー（ズルガー）がすなわちパッティニ神である。スリランカの東沿岸地方のカンナギプンマーンというヒンド教の神も，同じパッティニである。パッティニのような母－神信仰（mother－goddess cults）は，インドやスリランカに限らず，アジア諸国にも広まったものだということが，様々な研究によって指摘されている[1]。

アジア諸国の昔話や神話の中では，道徳的な面から理想的な人物（王，父，母，子供，友人，愛人，妻，夫など）を中心にしたものが数多くみられる。この理想的な人物の行動は，ヒンド教や仏教の道徳に合わせたもので，この物語の人物の名前や場面の違いが多少見られるが，その理想像は共通する場合が多い。

図１　スリランカでガンマドヴァが行われる所



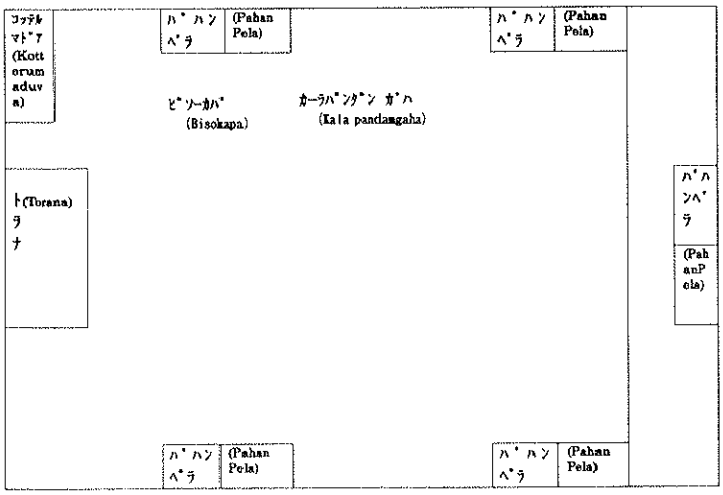
理想的な処女，恋人，妻であり，正直でしかも勇敢な女性であるガンマドヴァのパッチニ神も，その他のアジア諸国の理想的な女性像に共通している。ガンマドヴァで演じられる多くの物語は，パッティニ夫婦カンナギ，コーワラン（Kannagi,Kovalan）の人生が中心となっている。南インドのイランコーアチカル(Ilango Adigal)によって書かれた「シラッパヂカーラン」「Cilappatikaram」とシーッタレイチャーッタナール(Cittaleichattar)によって書かれた「マニメイカラーイ」「Manimekalai」（AD500－900）という有名なタミール歌の本２冊にも，カンナギ，コーワラン物語が中心となっている[vii]。1950年代に，Dhammaratana僧侶によってシンハラ語に翻訳された。

Adikaramの意見によれば，パッティニ神に関する信仰は，スリランカでは２世紀頃から始まったものである。その頃，ガジャバ(Gajaba)という王が南インドから捕まえてきたソリー（Soli）人12000と共に，パッティニ信仰もスリランカに流入したのではないかと，彼は考えている[viii]。ガンマドヴァの中で演じられている起源は昔，南インドのソリー（ケララKerala）国パーンヂPandi（セーラマーンSeraman）という王は，不治の頭痛で困っていた。しかし，ある日彼は夢をみた。夢の意味を調べたブラーフマナ(Brahmana)は，「仏教のある国でマドアを建て，神々を楽しませるために音楽，歌，踊りなどによる行事を行えば頭痛が治る」と言った。そこで，セーラマーン王はスリランカに行き，そこで行った行事で頭痛も完全に治し，国も豊かになった。これが最初のガンマドヴァで，現在まで代々伝われてきたとされている[ix]。

ガンマドヴァの祭場とその風景

ガンマドヴァは，村や神社の広場，又はスポンサーの庭で行われる。その場をきれいにし，白い砂をかけ，そこにマドア（大きな部屋）を建てる。（写真2）部屋の大きさは20×10メートルぐらいであり，壁はなく，切妻造の屋根が作られる。屋根には，ココナツの葉ゴッコラ（Gokkola），又はテントが使用される場合もある。このマドアの中に，プワック(Puvak)木，ココナツの若葉，バナナの木や葉，他の様々な葉でトラナ（Torana）という舞台背景が作られる。トラナは高さ3メートル横幅4メートルほどの平面で作られた装置で，その中央部分に棚が作られる。（写真3）その棚には，パッティニ神の服，足首飾りなどが置かれる。その両側にガンマドヴァに登場する他の主要な神，デボル(Devol)神とワーハラ(Vahala)神のために棚が作られ，花などが供えられる。トラナの後ろに舞い手が準備をする部屋が建てられる。ガンマドヴァの歌にも登場するこのトラナの作り方は，以下のように決まっている。トラナの前の5平方メートルぐらいがガンマドヴァが行われる広場になる。広場の周りはココナツの若葉（ゴッコラ）で飾られた縄を付け，その中側には様々な神々を祭るための小さな神棚のようなものをゴッコラで作る。又，マドアや広場の周りに，ヤシ科の植物の房を5種類以上吊るす。（ナワシ(Navasi)，ボーヂリ(Bodili)，タル(Tal)，キトル(Kitul)，テビリ(Tembili)，プワク(Puvak)，イヂ(Indi)など）マドアの前にゴッコラで飾られた5メートルほどの高さのプワク木が立てられ，その上から広場の周りの縄まで広げるようにゴッコラのロープを結ぶ。ガンマドヴァを行うとき，その頂上にたいまつを付ける。これはカーラパンダンガハと呼ばれ，デボル神がある日インドからスリランカに乗って来た船の帆柱を表した柱である。（写真4）ガンマドヴァに火を踏むための薪を探すミッラケピーマ(Millakepima)という場面があるので，薪として使われるミッラという木の枝が敷地内に作られる。（図2）このように作られたガンマドヴァの舞台は，神々が天上から降りてきて住む清い場所とされる。

図2　ガンマドヴァ祭場



ガンマドヴァの構成

今から100年ほど前には，ガンマドヴァでは主な儀礼以外の35種類の演目パンチス　コールムラ Panthis Kolmura（参考１）が一週間ぐらいかけて演じられたと言われている。

この35の演目で演じられる物語は，パッティニ神の出生以前からの出来事，この信仰をスリランカに伝えたとされる王に関する出来事，ガンマドヴァと関係のある他の神々に関する出来事などで構成されている。スリランカでのパッティニは，将来仏陀になるとされる神であり，ディーパンカラ(Dipankara)仏陀にマンゴを供えた功徳によって，パーヂ王の植物園にあるマンゴの木の実として生まれた。王の命令に従って，様々な人がこのマンゴを取ろうとしたが，誰もこのマンゴを取れなかった。ある日，老人の姿で現れた大神が弓でマンゴを取ることに成功した。しかし，その時飛び散った果汁によって王の目が悪くなった。怒った王はマンゴを金の箱に入れ，カーベーリ（Kaveri）川に流させた。それがカーベーリ港で泳いでいたパーラガ（コーワラン）の手に入り７日後，マンゴからきれいな女の子が生まれる。彼女はパッティニ（カンナギ）と呼ばれ，大人になり，コーワランと結婚する。しかし，この夫婦関係はうまくいかず，コーワランはマータヴィ（Madhavi）というパーヂ王の妻の一人と恋愛関係になった。マータヴィを満足させるために全財産を使ったコーワランは，自分の妻カンナギの高価な足首飾りを売ろうとした。一方，その頃王の正妻の足首飾りが盗まれるという事件があった。カンナギの足首飾りを売ろうとしたコーワランは，その泥棒と間違えられ，逮捕されて処刑されてしまった。王の仕打ちに嘆き悲しんだカンナギは，自分の左の乳房を切り取り地面に叩きつけた。その衝撃で街は崩壊し，王の命も奪われた。その後，カンナギは超自然的な力でコーワランを蘇らせた[x]。この物語から35部分に分けた物語がガンマドヴァの35の演目として演じられる。

ガンマドヴァの構成には地域的に様々な違いがみられるが，表3に構成を紹介するガンマドヴァは，1990年12月28，29，30日コロンボのカルボーヴィラ（Kalubovila）で行われたものであり，私が今まで見た中で原形に近いと考えられるガンマドヴァの例である。

表２　ガンマドヴァの順序

日－時間	行事名	内容
【1】 1990/12/16 午後３：00	カパヒタウィーマ (Kapahitavima)	ガンマドヴァを行う２週間前に神々にこの日を知らせ，約束をし，神々を招待し，協力を願う行事である。
【2】 1990/12/28 （１日目） 午後７：00	マドア アラビーマ （Maduvapekirima） （マドアを開くお祝いの太鼓とほら貝）	カプマハタによってガンマドヴァを行う場所で（ランプや花などを供え）ガンマドヴァを行うために神々の許可を願う（写真５）

【3】 7：10	パハナプージャー (Pahanpuja)	カプマハタとコッテールワKotteruva（祈祷師と手伝う人）によってガンマドヴァを行なう場所で四大守護神，四大神，パッティニ神，デヂムンダ神，十二の神の許可を願ってランプや花などを供える。
【4】 7：20	ーテルウェダマウィーマ（Tel vedamavima 油の供え）	頭の上にココナツ油を入れたものを乗せ，マドア場の神々を供えるために作られた神棚のランプに油を入れる。特にカタラガマ(Kataragama)とウィシヌ(Vishnu)神を主にしている。
【5】 7：30	パハンデルヴィマ (Pahandelvima)	ランプを付け，ほら貝を吹き，ズンマラゲシーマ（Dummalagesima香木を入れる）などをしながら神々の名前を呼び，祈願をし，踊りや歌を神々に供える。
【6】 7：45	デヴィヤンヴェダマヴィマ (Deviyanvedamavima)	リーダーの祈祷師がカハヂヤラKhadiyara（穢れをなくせるためにカハといういもで作られた黄色い水）をガンマドヴァ場，トラナ，神棚などにかけズンマラ煙の芳香をかけ，それぞれの神棚に食べ物を供え，神々を神棚へ呼ぶ。
【7】 8：00	ダルムラピヂーマ (Dalumurapidima)	太鼓を叩きながら神棚にプワクの花とズンマラ煙を供え，カプマハタ（祈祷師）２人ずつ踊りながら，周りの皆の五穀豊穣や無病息災を願う。
【8】 9：00	カーラパンダムヂーマ Kalapandamadim （たいまつの供え）	火を付けたたいまつ二本を持ち，カプマハタ二人が踊りながら登場する。一人は神棚すべてにズンマラ火を供える。リーダーは観客の一人からパンダマ(Pandama)をもらい，長い歌と踊りで五穀豊穣無病息災を願う。ここで神話からパッティニ，ウィシヌ，デボル神の関係を踊りながら歌う。
【9】 1990/12/29 （２日目） 午前8：30	デーワダーナヤ (Devadanaya)	マドア場にござを引いて，その上に座った村の人々がバナナの葉に乗せたご飯とカレを食べる。その後，バナナやお菓子などを食べる。
【10】 午後4：00	マドアペーキリーマ (Maduvapekirima)	リーダーのカプマハタ(Kapumahata)が完全に飾られたトラナやガンマドヴァ場にカハヂヤラをかけ，清め，神棚すべてにランプを付ける。ほら貝につれてお祝いの太鼓が叩かれる。カプマハタたちが，すべての神棚の前でそれぞれの神のために舞う。（写真６）

【11】 4：30	ミッラケピーマ (millakepima)	ミッラという木がある所まで太鼓，歌，踊り，ズンマラ(Dummala)火と煙を行いながら行き，その枝を切り，行列で持って来る行事である。その枝は最後の火を焚くための薪になる。(写真７)
【12】 6：00	ビソーカパヒトヴィーマ(Bisokapahitavima)	ビソーカパというのは，ガンマドヴァを管理しているパッティニ神が座るためにバナナの木やゴッコラで作られた長さ20cmぐらいのものである。ビソーカパの起源を歌や踊りで演じながらトラナの前に付ける。
【13】 7：00	センデージャーメドラピヂーマ (Sendejamedolapidima)	ヤカ(悪魔)のために供える食べ物や焼き物などをバナナの木やゴッコラ(ココナツの若葉)で飾られた大きな皿のようなものに乗せる。そこにズンマラ火と煙をかけながら踊る。またリーダーのグルンナーンセとカプマハタとの悪魔に関する会話を通して，観客を笑わせる。最後に，観客の一人をトラナの前に座らせて，悪魔のために作られた食べ物などがのった棚をアートラの頭の上に置き，悪魔に供える。
【14】 9：00	トラナヤーガヤ (ToranaYagaya)	トラナを通して，カプマハタは組織者やスポンサーを紹介し，感謝する。次に，仏陀，ダルマ，サンガを供え，神々の起源，特徴と役割を述べる。トラナの起源，カーストによって変わるトラナの種類や特徴を歌いながら舞う。この村のガンマドヴァの歴史，組織者やスポンサーは誰なのか彼らの役割の重要性は何なのかなども述べ，集まっている皆を歓迎する。最後にパーヂ(Pandi)王に殺されたパッティニ神の主人を又パッティニ神によって生きがえらせることが歌われる。(写真８)
【15】 10：35	サラバウェダマウィーマ (Salambavedamavima)	(パッティニ神の道具や服をトラナに置くこと) カプマハタは女の服を着てパッティニ神の姿と思われる姿になり，パーワダ(Pavada)，ウドウィヤン(Uduviyan)[上に白い布をはき，下も白い布を引き＝汚れのない]によりガンマドヴァ場の真ん中にある机までトラナから取ったパッティニ道具を持っていく。そこでそれを洗う様子を表し，後踊りながら帰ってきてまたトラナにあるパッティニ棚に置く。それからパッティニ神を呼び，最後にパッティニサラバ(Pattini Salaba)を振り回しながら皆にお祈りする。(写真９)

【16】 11：00	テルメ舞(Telme)	パンダマ踊り又12神の踊りともいわれるこの踊りでは，神々にパンダマと花を供えることが目的である。リーダーのカプマハタと６人の弟子の踊りであるが最後にリーダーは30分ほど速い踊りをし，バナナ木やゴッコラで飾られたタトア(大きな皿)にのせた食べ物や火をつけたパンダマを神々に供える。(写真10)
【17】 1990/12/30 (３日目) 午前１：00	ピヌムタラガ (Pinumtaraga)	ガンマドヴァと直接の関係は見られないが，最近はやっている場面である。見物の人々を喜ばせるために使われる若者の強さを見せるものである。(写真11)
【18】 ４：00	ワーハラ舞(Vahala)	ワーハラというのは，すべてのヤカ(悪魔)のリーダーであるワイスラワナ(Vaisravana)という神のことである。リーダーのカプマハタの上級の弟子によって行われる。この踊りはガンマドヴァのすばらしさが表れるれる美しい踊りである。１時間30分ぐらい続けて早いスピードでワーハラ神の強さと力を表すこの踊りは，カプマハタワーハラ神のアーウェシャ(dishti)になって(ワーハラ神の所有になって)から踊るといわれている。赤色の長い帽子をかぶり，両手にたいまつを持ち，ズンマラ火と煙を投げながら踊り，次に両手に持つココナツの皮をむいた固い花を30個ぐらい顔に当てて潰しながら踊る。顔に傷がないのは驚くに値する。太鼓によって，スピードをあげ，１時間半続くこの踊りは太鼓とともに止まり，カプマハタは地面に倒れるが手伝う人によってトラナの前に寝かせて，カハヂヤラをかけ立てられる。ワーハラ舞の最後に五種類の野菜で作られたカレーや飯，バナナ，ケヴムなどお菓子でワーハラ神を供える。(写真12)
【19】 ６：00	ドラハペラパーリ (Dolahapelapali12の舞)	12種類の主な神々のために演じられる12の短い物語で集まっている人を笑わせるための言葉使いの間違いなどの聞き取りによる場面であり，会話は，主に太鼓奏者とカプマハタの間で行なわれる。神々に供えるものを決める話を通して，この笑い話が出てくる。
【20】 ８：00	アンバウィヂーマ (Ambavidimaマンゴを取る)	パッティニ神の生まれに関する昔話によると，パッティニ神３種類の生まれに関する物語がある。その一つはインドのパーンヂ王の果樹園のマンゴの実から生まれたと

		いう話で，それを歌や踊りで演じる場面である。
【21】 9：00	パーラガメラヴィーマ (Palagameravima パーラガを殺される)	恋人のマーダヴィ（Madhavi）のため自分の持つ全てを使ってしまい，困ったパーラガは妻のパッティニの値段の高い足首飾りを売ろうとする。しかし，その頃パーンディ女王の足首飾りもなくなっていたので，泥棒はパーラガと疑われ，逮捕された末，王の命令で殺される話が演じられる。
【22】 9：30	マラーイペッドマ (Maraipedduma よみがえらせる)	主人を探し，カーベーリ港からマドラー市まで歩いて行くパッティニはパーンデ 王に殺されたパーラガの遺体を見つけ，王の仕打ちに嘆き悲しんだカンナギは，自分の左の乳房を切り取り，地面に叩きつけ，その衝撃で街は崩壊し，王の命も奪われ，パッティニは超自然的な力でパーラガを蘇らせたことが，演じられる。(写真 13)
【23】 10：25	ギニペーギーマ (Ginipegima 火渡り) デボル神舞	以前取ってきて用意されたミッラ薪でトラナの正面に火を作られる。火とトラナの間に 2 人に持たられた紐があり，これは門を表す。カプマハタはデボル神の姿を表し，この門を超え，薪の方に行こうとする。それがデボルという神がスリランカに最初に入ろうとした時，パッティニ神によって門と火で防止したことと，デボル神がスリランカの人の病気を全部を治すとパッティニ神に約束し，スリランカに入る許可をもらった様子をここで演じる。(写真 14)
【24】 10：40	キリイチリーマ (Kiriitiravima)	牛乳が溢れるというのは幸福と喜びを表し，ガンマドヴァを行なわれたことによって村や地方が幸福になったという意味を表している。(なべに入れた牛乳を溢れるまで湧かす。)（写真 15）
【25】 11：30	ガラーヤクマ (Garayakuma) ガラーという悪魔の踊り)	シンハラ人による多くの行事は，ガラー舞で終了する。ガラーというのはヤカ悪魔の一人であるが，人間に悪い影響を与える悪魔ではなく人間が直面する悪い超自然的な影響をなくす良い悪魔と考えられるので，ガラーヤクマは新築など個人的なイベントとしても幸福や安全を願って行われる仮面踊りである。 ガラー舞は，リーダーのカプマハタ以外 1 人か 2 人によって舞う。踊りの前半部分は仮面を使わずに踊り，後半部分は仮面をつけて踊りながらアイレに乗り，横棒に座り，リーダーのカプマハタや太鼓奏者と会話を通じてガ

		ラーヤカの姿，家族関係，パッティニなど他の神々との関係などを説明する。その会話は言葉使いの間違いと，間違いへの受け答えによる笑い話と性的な笑い話が多い。(写真16)
【26】 午後2：00	プージャーベラワーダナ(pujaberavadana)	神々に供えるために太鼓を叩く。
【27】 2：30	デヴィヤンヴィマンガタキリーマ(Deviyanvimangatakirima)神々を宿っている場所に送る	ガンマドヴァを終了する前に神々の名前を呼び，履歴を説明し，ドーサを無くし，幸福を呼んでくれたことに感謝し，そのお礼として功徳，食べ物，良い匂いの煙，歌，踊り，音楽，等様々なものを供えたということを歌で説明し，神々を送る。

ガンマドヴァの音楽

神々やヤカ（悪魔）との伝達の手段として，また神々への供え物として，ガンマドヴァでは音楽が使用されている。特に，5人のデボル(Devol)太鼓（ヤクベラヤYakberaya），ほら貝(Hakgediya)，舞手の足首に飾られているベル（ゲッジGejjiとパーダジャーラーPadajala）の音，歌（カヴィKavi）などが，ガンマドヴァの音楽の中心となっている。

ガンマドヴァの踊りは殆ど太鼓の音で統制される。その太鼓はヤクベラヤ（Yakberaya）といわれ，牛の皮でその両側は固く締められている。公演の前に調節し，両手で叩く。使用される手の部分によって，リズムが変わったりする。手の様々な使い方によって，細かい音がでるようになっている。ガンマドヴァのために，三人から五人の太鼓奏者が必要である。太鼓のリズムに合わせた口拍子があり，太鼓奏者も舞手も口でその音を出しながら，太鼓を叩いたり舞ったりする。

スリランカでは，カースト制度によって太鼓奏者は低い社会階層に位置している。しかし現在ではカーストに関わりなく，ガンマドヴァの様々な役を全てのメンバーによって行なうグループもいる。ほら貝は，ガンマドヴァを始める時と，尊敬される神舞の始まりにならすが，続けては使わない。

ガンマドヴァの踊り

ガンマドヴァの踊りは，神々やヤカを楽しませるための主な手段である。しかし，行事としての祈願と同時に，見物人を楽しませるという目的もあるのではないかと考えられる。具体的には，ガラーヤクマ（ガラ悪魔舞），デボル神舞，ヴァーハラ神舞や以前あった35の演目にその傾向がみられる。それぞれの踊りに含まれている物語は，見物人向けに作られたものである。神々や悪魔の性格を具象化する手段としても，踊りが使われている。

また，踊りは神々や悪魔と交流する手段として使われている。ガンマドヴァの祭場では普段から信仰されている神々や恐怖の対象となっている悪魔と，お互いに冗談や話しができるようになっている。例えば，ワーハラ舞で登場するヴァーハラ神は全ての悪魔を治めている神であるが，ガ

ンマドヴァ場での行事の間，太鼓奏者と笑い話をしたり，見物人に冗談を言ったり，最後に村人に災いを起こす悪魔をズンマラ火で追い払い，病人や老年に祈りし，人々の幸福や安全を願い，祭場にいる人々と親密な関係を保つ。ガンマドヴァの場での神々や悪魔と人間との関係が踊りを通して精神的な段階を超え，もののやり取りまで具体化されている。ガンマドヴァの最後のガラ舞ではガラヤカは手に持つブルッラ（Burulla）枝で病人の頭から足まで三回なでる。（ブルッラ枝でなでることによって，病気や悪例による問題（ドーサDosa）は体から捨てられることを意味する）。デボル神舞でのカダヴァタペニーマ（Kadawata penima）という場面では，見物人から呼ばれた二人に紐を引っ張り持つことによって，デボル神の入場が防止される。しかし，デボル神に怒られ，非難され，笑われた末，仏陀の許可を得て門を通る。写真（14）

民俗芸能の踊りについては，観客との関係も極めて重要である。パドルヂィーマ（金をあげること），拝むこと，手を叩いたり，騒いだりすることや，場合によっては舞手に協力することなどが舞手の気持ちに影響を与える。

山伏神楽

神楽は日本の独自な民俗芸能であり，神道を基にして始まったといわれている。神楽は，多くの日本の村では神々を祭るために行われているが，地方によって違いがある。本研究の前提となった調査地（新潟県，愛知県，奈良県，神奈川県，山形県 青森県）の神楽にも様々な違いがみられた。一般的に，神楽はガンマドヴァと同様に，五穀豊穣や無病息災を願って神々を楽しませることを目的として行われる民俗芸能である。神話から取り上げた神道の神々に関する物語や，歴史上のヒーローに関する物語，狂言など，歌，踊り，音楽，会話などを含めた美しい民俗芸能である。

神楽（カグラ）の語源は，神座（カムクラ・カンザ）からでたものと言われている。

神座とは，天上にいる神々が，地上に降りられた際，身を宿らせるところという意味である。当初は高い峰や巨木といった自然物から神社等の固定された人造物をも指し，やがて場所を移動させて臨時的に設けられるところ，あるいは，面・装束・採物をつけた舞人そのものをも神座と見なすようになり，そこで行われる楽舞全体を神楽というようになったと考えられている[xi]。

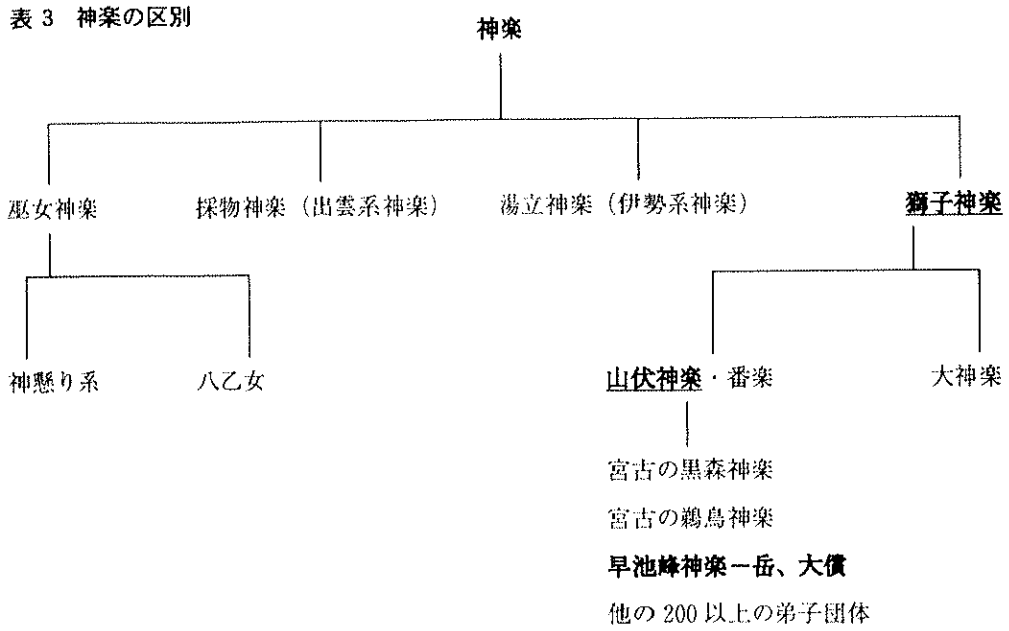
起源

神楽の始まりについては，古事記や日本書紀の起源に，「アマテラスオオミカミ（天照大神）という天の神様が，弟のタケハヤスサノオノミコト（建速須佐男命）という海の神様の悪行に怒って，天の岩屋の中に隠し，戸を閉ざしてしまったため，天も地も真っ暗やみになってしまった。そこで，様々な災いが起き，大変困った神々が集まって相談し，アメノウズメノミコト（天宇受売女）という若い女の神様が，天の岩屋戸の前で足を踏み鳴らし，手ぶり身ぶりおもしろおかしく踊り，アマテラスオオミカミが天の岩屋から出られるきっかけをつくった」ということが書かれている。これが神楽の始まりで，現在まで代々伝えられてきたとされている[xii]。

山伏神楽

日本では，地方によって数多くの種類の神楽が行なわれている。それらを性格によって分類すると，(表3) のようになる[xiii]。

表 3　神楽の区別



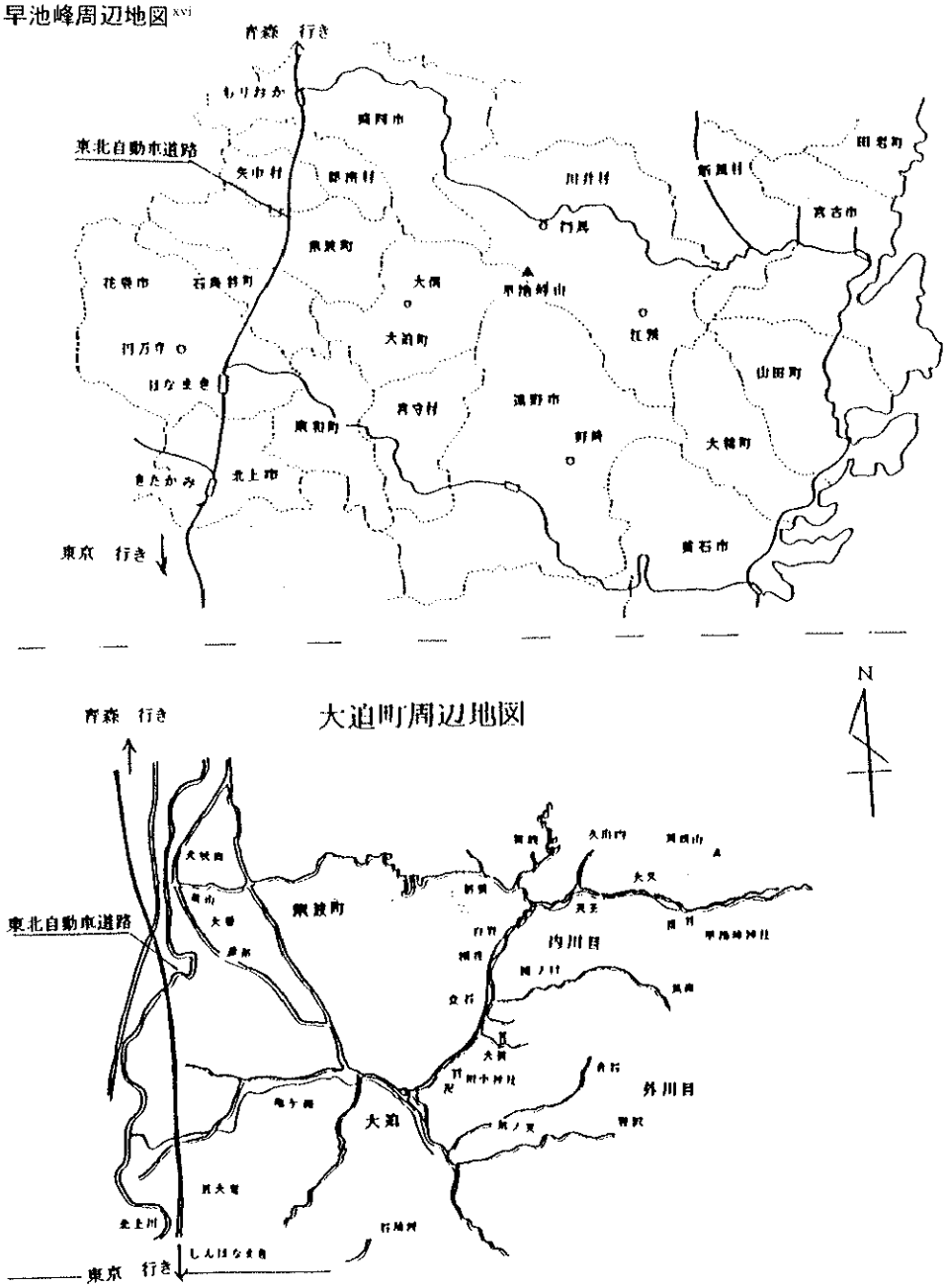
本田安次 (1942) によれば，「山伏神楽というのは奥羽山脈を境にして東側の陸中陸奥においては主に山伏によって行なわれたためこのように通称されている」という。特に岩手，青森，秋田，山形，の4県に分布しており，地方差はあるが全で山伏神楽の名で呼ばれている。さらに，同上書によれば，「山伏神楽，獅子舞，権現舞，番楽，ひやまなどと呼ばれている古い舞曲が北は下北半島から南は最上郡に至る地域に広く分布している。これらの舞曲を詳しく調べてみると，純粋の御神楽ではなく，猿楽の能でもなく舞楽延年の類とも違っているが，それらの要素も少しずつそなえている不思議な儀礼を持った舞である。霜月のころになると，近辺の山伏たちが集まってグループを作り，火伏せや悪魔払いの祈祷に，その奉ずる権現の獅子頭をまわしながら，毎年1年ごと，あるいは3年ごとに周ったもので，これを周り神楽，通り神楽，あるいは門打ちと称した[xiv]。」山伏神楽は，表•4で示した通り，獅子神楽に属するものである。獅子神楽とは獅子頭を仮に神の姿を現したもの，を権現として，この権現を奉じて霜月（旧十一月）の頃から特定の村々をめぐり，権現をまわしては悪魔払いや火伏せの祈祷をするものである。

早池峰神楽

本研究の対象となっているのが，岩手県の山伏神楽のうち最も良く知られいる稗貫郡，大迫町，内川目村，岳集落の岳神楽と大償集落の大償神楽より成る早池峰神楽である。早池峰神楽は北上

山地の最高峰であり，信仰の対象としても知られている。早池峰神楽は早池峰山を霊峰として活動した山伏が伝えた神楽で，数多くの弟子神楽を持ち，山伏神楽の今の流派を形成している。大償・岳両神楽は内川目田中にあった田中明神の神楽の流れを及むとされている[xv]。

図 3　早池峰周辺地図[xvi]



早池峰神楽の祭場とその風景

現在，早池峰神楽は神社の神楽殿（写真17），神社の会館（写真18），神楽の館，民家一般の会館などで行われる。民家で行なわれる場合は，襖が取り外され，約二間四方の板の間が舞殿で四方にしめ縄を張りめぐらし，奥に社紋・社名が染めぬかれた幕が張られる。幕後方の間が楽屋となり，舞殿前方または三方の間が見物人席となる。（写真19）「しめ縄が張りめぐらされたことによって神の座が設けられ，幕が張られたことによって幕内が神々の世界となり，舞台・見物人席の現世との違いを示したことになる」という[xiii]。近年まで女性は舞台に入れなかったが，現在では権現に祈ってもらうために舞台に上がる女性がみられる。早池峰神楽の幕は青色の厚布で，神楽団体の独自の旗になり，神社名，神社のシンボル，幕を奉納したスポンサー名などが書かれている。民家や神楽の館で行う場合（図 4 と写真19），神社の神楽殿ホールや公民館などで行う場合とがある。（図 5 と写真17，18）

図 4　早池峰神楽の祭場（民家や神楽の館で行う場合）

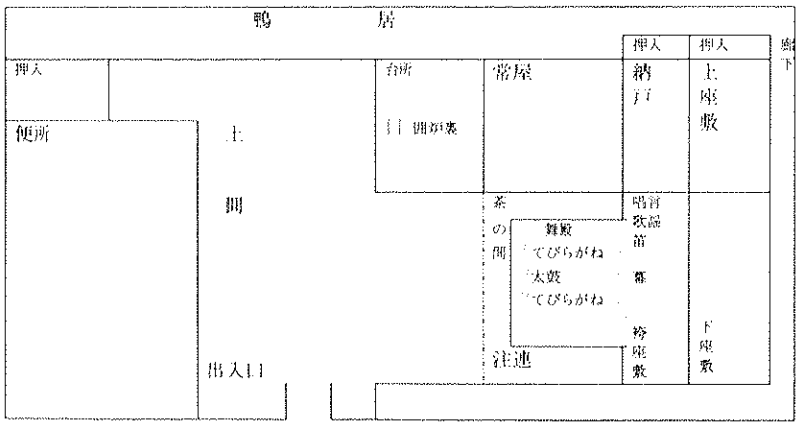
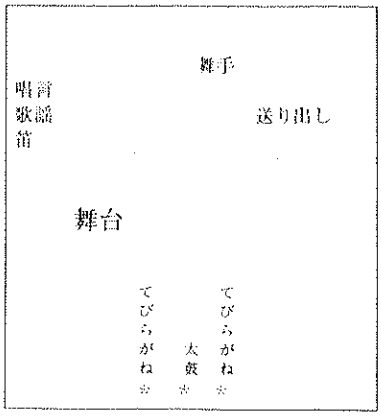


図 5　早池峰神楽の祭場（神社の神楽殿ホールや公民館などで行う場合）



早池峰神楽の構成

山伏神楽は獅子舞を中心に式舞，神舞，武士舞，女舞，に分類される様々な演目から構成され，中世から近世にかけて諸芸能の要素を取り入れ，修験道流に再構成されたといわれる。早池峰神楽の構成にも以上の舞に関する演目が50ぐらいあり（参考2），門打ちの場合は続けて行なわれたとされている。（写真20）しかし，様々な問題で門打ちがなくなった現在の岳神楽と大償神楽は，神楽殿，神社の会館，神楽の館，他の会館などで公演する場合，12ぐらいの演目しか行なわれていない。1999年1月2日大償の神楽の館で行なわれた大償神楽の舞初の順序を示しておく。

表 4　神楽の順序

日－時間	演目名	内容
【1】 1999/1/2日 午後13：00	鳥舞	神楽の最初に必ず演じられる舞であり，鶏の表情を表している。練り（演目の前半）の部分では，舞手が二人登場する。仮面をかぶらず，女の着物と烏かぶとをかぶり，採物（手に持つもの）として扇子と鈴木を持ち踊る。踊りも鳥の表情を思い出す。 くずし（演目の後半）の部分は，四人鳥舞といわれる鳥舞の裏舞で，四人登場する。最後は烏かぶとを外した踊りである。（写真21）
【2】 13：20	翁舞・白翁の舞	人々が松の葉の青さのようにいつも若く，元気で幸福になるように，長生きできるように，めでたいことばによる神歌で祈る舞である。練りの部分では，老年の男の仮面と翁かぶとというかぶとをかぶり，袴を着，採物として白い扇子と千早を採り登場する。練りの部分はゆっくりした踊りであるが，くずしの部分は速い踊りとなっている。（写真22）
【3】 14：00	三番叟・黒翁の舞	猿の顔をした黒い仮面と烏帽子をかぶり，扇子と鈴木を採物として手に持ち登場する。三番猿楽（サンバンサルゴウ）とも呼ばれ，東北山伏神楽にみられる特色のある踊りだといわれている[xviii]。猿は神々と人間を交流させるものとして，日本の民俗文化では考えられている。翁舞は白く丈夫な体を持つように祈る神の舞で，10歳から20歳までの若者だけが舞うことになっている。くずしの部分は仮面を外さないが採物をもたずに踊る。速い踊りである。（写真23）
【4】	裏三番叟／後追い三番	赤くこっけいな表情の仮面と烏帽子をかぶり，扇子と鈴木を採物として手に持ち，登場する。道化役が出てから登場し，舞方はわざと三番叟の見様見真似で，間違ったり，転んだり，見物の人達をからかったりし，皆を笑わせる演目である。（写真23）

【5】 14：30	八幡舞	袴と襦袢を着，鳥かぶとをかぶり，仮面はかぶらず，小さな弓矢を持ち，二人の舞手が登場する。八幡は平安時代から有名になった神である。鎌倉時代では戦争の神として有名になっていたので，神楽の中では弓矢を持って登場するのではないかと考えられる。弓矢の神徳をたたえ，四方へ矢を射て悪魔を払う。くずしの部分では刀を持ち四方向を切ることを表す。神仏混交の菩薩信仰から出発したとされている[xix]。(写真24)
【6】 14：45	山の神舞	東北山伏神楽の中心にみられる有名な踊り[xx]。舞手は一人で，赤い顔と金色の目の仮面と鳥かぶとをかぶって登場する。仮面の口は岳神楽の場合は“ウン”(UN) という音するように閉っており，大償の場合は，“ア"(A)という音がするように開いている。襦袢と着物を着，刀を持ち登場する。山の神由来を語り，年の豊作を願って四方向鎮めを行い，刀を採って悪魔を払う。託宣，幣打ちなど変化に富んだ豪壮な舞で，春は里に降って農業の神となり，秋は山に帰って山を守る山の神として，農家や山仕事をする絶対的存在である。くずしの部分では鳥かぶとや仮面を外し，白い剤を着，採物として扇子，鈴木，剛平，刀などを取りながら舞う。(写真25)
【7】 15：30	岩戸開	神楽の由来と岩戸開きの関わり説明が本旨で，アマテラスオオミカミなど登場人物により，その語りに振りがつけられたものである。怒ったアマテラスオオミカミを岩戸から出させるための神々の努力や,最後のアメノウスメノミコトの踊りや他の神々の音楽によって，アマテラスオオミカミが岩戸を開き，世界が明るくなった物語を演じる。練りの部分では黒い着物を着，アマテラス仮面と特別なかぶとをかぶった舞手と白い仮面をかぶり，鳥かぶとや袴をかぶった舞手が登場する。くずしは四人の踊りであり，仮面だけ外し踊る。最後に四方向を清める。(写真26)
【8】 16：00	松迎	翁舞の裏舞といわれ，登場者は二人である。御神楽から始まったと考えられる[xxi]。この踊りも，四季と人間との関係を四方向に広がっている松木の枝にたとえて歌う。特に，舞初めで新年にめでたいことを祈る。姿は翁と似ている。(写真27)
【9】 16：30	天降り	天孫降臨の場面の舞で，アマノウスメノミコトとアメノオシヒノミコト・アマソクサヤノミコト，ダヒコノミコトという四人の神を表す四人の舞である。
【10】 16：55	狂言	狂言田植（写真28）

【11】 17：20	狂言	しゅうとう見参
【12】 18：00	権現舞	山伏神楽の重要な踊りである。仮面をかぶった舞手の踊りではなく，木で作られた獅子頭につなげた幕を，二人の舞手によって獅子が踊るように踊らせる。権現舞に似たような踊りが，インド，ネパール，タイ，インドネシアなどアジア諸国にみられるが，中国の獅子踊りとの関係が深いとされる。７世紀に伎楽の部分として，中国から入ってきたという説もある。東北地方の山伏神楽の獅子踊りを権現舞と呼ぶように，仏教的色彩も持っている[xxii]。現在では権現様は，有名になり，個人の家にも祭られている。 早池峰神楽の権現様は早池峰神と仏陀がママ方として祭られている。一つの木で作られた早池峰の獅子頭は人間の頭の3-4倍ぐらいあり，口は開け閉めできるようになっている。遊ばせる（踊らせる）人によって，獅子頭の口で柔らかく噛むことか上から口を叩くことによって幸福や無病になると考えられている。そのため，権現舞の後半では，観客の老人，病人や子供などが権現様に頭を噛んでもらうために舞台に上がることもある。 新築や赤ん坊，老人や病人は，噛んでもらうために呼ばれることが多い。米，野菜，果物なども病気がなく良い収穫をできるように，また最近では会社や営業なども盛んになるためにも噛んでもらう。 早池峰神楽での権現舞の後半ではシャモンによって米，野菜，果物，酒などを権現様に供え，噛んでもらい，災害がおこらないように備えた水で“水まき”という行事を行い四方向に水をまく。この水は病気を治す力があると考えられているので，飲むこともある。（写真29）

神楽の音楽

日本の神々に関する祭には，一般的に神と人との関係を表すために音楽（歌や踊り）が使われている。楽器と歌によって神々を楽しませ，踊らせるという考えは神楽にもガンマドヴァにも共通する。“神楽”という漢字も，神々の音楽という意味である。神楽の始まりに関する神話にも，音楽はアマテラスオオミカミを岩屋から出されるきっかけになったとされている。

早池峰神楽の音楽には山伏の影響が顕著にみられる。音楽のリズムに関しては，岳神楽の場合は五拍子であり，大償神楽は七拍子である[xxiii]。神楽の音楽は楽器の音，神歌，シャモンの語り，舞手の足の踏み鳴らしや採物の音を含めたものである。

太鼓

神楽太鼓は太鼓どうといわれ，神楽の主な楽器である。締め太鼓とも呼ばれ，牛の皮で両側は固く紐で締めている。公演前に調節し，天然木で作られた2つのバチで太鼓を叩く。

神楽の太鼓を叩く人は堂前とか道取りと呼ばれており，神楽の踊り，歌，楽器など全ての知識を持っている。そのため皆の尊敬を受けており，全ての舞手も踊りを終えてから堂前にお辞儀をして舞台を降りる。堂前は，神楽グループのリーダーになることも多い。

堂前は太鼓の音に合わせて，口で音を出しながら太鼓を叩く。例えば，三番叟の舞始めの神歌の“ミソダリサンバーソミソダリサンバソ”という太鼓のリズムを口拍子で表現すると，“ダンクダンクダン，クダンクダン”となる（佐々木隆氏との面接調査，1998）。舞手は踊りを覚える時もその口拍子と一緒に覚えるという。そうすれば，踊りを稽古する時太鼓がなくても，口拍子によって稽古ができる。

竹で作られた笛は多いが，現在ではプラスチックや銀で作られた笛もある。笛手は幕の後ろにいるので観客には見えない。舞手が舞台に登場するのと同時に，太鼓に合わせて吹き始める。早池峰神楽の笛は，普通の笛と違って7つの穴のうち5つの穴しか使わないのである。つまり，他の2つの穴を指で閉じたまま使用する。

早池峰神楽で使われているてびらがねは，直径は17cmの銅で作られた小さな2つの皿のようなものであり，アジア諸国によくみられる楽器である。堂前の両側に二人のてびらがねを叩く人が，幕に向かって座る。太鼓の音に合わせて音をだす。（写真30，31）

神楽の踊り

神楽の踊りは神々を楽しませることを目的としている。しかし，現在神楽の場合はこの宗教性だけではなく，芸術性も認められたいということが現地以外の公演会，都会や外国における公演会などで広く通説となっている。現在では，この宗教性以外の側面が一つの芸能としてアピールされていると言えるだろう。行事としての祈願と同時に，見物人を楽しませるということが神楽でも認識できる。裏三番叟の舞や狂言などを調べると，その娯楽性が明らかになる。それぞれの踊りに含まれている物語は，見物人を楽しませるために作られたものである。滑稽さを強調して観客に娯楽を提供している部分は特に大きく，こうした点もガンマドヴァと共通していると言える。

神楽の踊りは人間が神々や悪魔と交流する手段として使われている。神楽の祭場では，普段から信仰されている神々や，恐怖の対象となっている悪魔と，お互いに冗談や話しができるようになっている。例えば，神楽が行われる場合も，行われる場というのは神々が天上から降りてきて，人間とともに酒を飲み楽しむ場所として考えられている。

神楽の場で踊る神々と人間との関係が，ガンマドヴァと同様に精神的な段階を超え，もののやり取りまで具体化している。例えば山の神舞では山の神は観客に菓子や果物などをあげることや神楽の権現舞では，権現様の口で自分の頭を触れてもらうこと（病気や災いなくすために，頭が良くなるために），権現が配る水を飲むこと（無病のため），神楽の山神は村の女の着物を着るこ

祭場	村の広場やスポンサーの庭	神社の神楽殿，神社の会館，神楽の館，一般の家や一般の会館
	祭場は神々が天上から降りられる清められた場所と考えられ，ケガレの関係で女性は祭場に入れない	祭場は神々が天上から降りられる清められた場所と考えられ，ケガレの関係で女性は祭場に入れない
音楽	神々やヤカ（悪魔）との伝達の手段として使用されている	"神楽"と言う漢字も神々の音楽という意味で，神々との伝達の手段として使用されている
楽器	太鼓（ヤクベラヤ），ほら貝，舞手の足首に飾られているベルの音や歌	太鼓（太鼓どう），てびらがね，笛，舞手の足の踏み鳴らしや採物の音や歌
踊り	神々やヤカを楽しませる手段	神々を楽しませる手段
	見物人を楽しませる目的	見物人を楽しませる目的
	神々や悪魔と交流する手段	神々や悪魔と交流する手段
	神々や悪魔の性格を具体化する手段	神々や悪魔の性格を具体化する手段
	人々に悪い影響を与える神々や悪魔の存在を追い払う	神々によって悪魔を追い払う
	神々や悪魔が場所を清める	神々が場所を清める

表6でまとめた共通点及び相違点は本論終章においてガンマドヴァの存続に向けて手がかりを探る際に改めて取り上げたい。

III　ガンマドヴァと山伏神楽に対する人々の関わり

ここでは，ガンマドヴァと神楽にに関わっている祈祷師，観客，組織者，祈祷師あるいは組織者である人々との面接やアンケート調査を中心にし，現在行われている民俗芸能がどのように運営実施されているのかを検討する。被調査者の数，年齢や男女別は（7）と（8）のようになる。

表 6　ガンマドヴァ【被調査者：60 名】

年齢	祈祷師		観客		組織者		組織者・祈祷師	
	男	女	男	女	男	女	男	女
２０～２９	1	0	2	1	1	0	0	0
３０～３９	1	0	4	0	2	1	0	0
４０～４９	2	0	4	1	7	2	0	0
５０～５９	8	0	4	0	4	1	2	0
６０～７０	5	0	2	1	1	0	3	0
計	17	0	16	3	15	4	5	0
合計	17		19		19		5	

表７　早池峰神楽【被調査者：60名】

年齢	祈祷師		観客		組織者		組織者・祈祷師	
	男	女	男	女	男	女	男	女
２０～２９	0	0	2	2	2	0	2	0
３０～３９	0	0	8	2	5	0	2	0
４０～４９	0	0	6	1	2	0	4	0
５０～５９	0	0	4	2	4	0	4	0
６０～７０	0	0	2	1	2	0	3	0
計	0	0	22	8	15	0	15	0
合計	0		30		15		15	

ガンマドヴァに関する組織

スリランカの多くの村には，村落レベルのボランティア活動に関わることを特徴としている若者の組織がある。それらは日本の若者組に類似している組織で，地方によって様々な違いが見られ，主に2つの種類に分けられる。一つ目は，1年中行動している組織でガンマドヴァだけではなく，様々な年中行事やボランティア活動に関わっている。スリランカのColombo（コロンボ）地方のBoralesgamuwa村ではガンマドヴァ運営に関わっているTaruna Samitiyaという若者組織がガンマドヴァを運営しているが，他の年中行事であるウェサック（Vesak），ポソン(Poson)，など祭での様々なイベントにも関わっている。ガンマドヴァに対しては，行う日を決め，ガンマドヴァの様々な役割を果す人を招待すること，村の一軒ずつ回り，必要な物やお金を集めること，予算やガンマドヴァの運営などに関わっている。

２つ目は一時的な組織で年中行事や他の祭のためにイベントを行うことが目的として一次的に出てきて行動する組織である。ガンパハ(Gampaha)地方のマービマ(Mabima)ガンマドヴァ組織も一次的であり，活動はウェサック（Vesak）祭りのためのウェサックトラナ（大きな電気飾り）を創ることや，ウェサックダンセラ（人々に食べ物や飲み物を無料であげるプログラム）を開くこと，正月の祭りの準備，地域の人のお葬式を援助すること，地域での他のボランティア活動などである。この組織は一時的なものなので，イベントが行なわれた後は消える。イベントのために集めた資金や物品などの残りがあれば，病院や老人ホームに寄付する。

神楽に関する村の組織

日本のある村では，村のボランティア活動に関わること目的としている「若者組」という組織がみられるが，研究対象になった早池峰では「若者組」の活動は見られない。早池峰神楽の場合は，国の重要無形民俗文化財保護の協力を基に，村落レベルから自然発生したいくつかの団体がみられる。

神楽保存会は，神楽の指導者，舞手など，神楽に実際に関わっている人々の組織であり，1981年，文化庁の民俗無形文化財保護の指定を受けてから神楽保存会という名前になった。早池峰では，岳神楽保存会と大償神楽保存会という２つの組織がみられる。早池峰大償神楽保存会の現在

のメンバーは15名，佐々木隆氏である。早池峰岳神楽保存会の現在のメンバーは16名，で会長は伊藤寿一氏で，小国朋身は，現在早池峰岳神楽グループのリーダーとなっている。

岳と大償神楽の保存会の主な目的として神楽をそのまま保存伝承し，続けること，日本を代表する民俗芸能として，人々に知らせること，自分の村（大迫）を神楽を通して，村に活気を与えること，全国や外国との交流推進などがあげられる。活動として特に毎年行われる舞初め，夏祭りと舞納めの運営，招待される公演やイベントの運営，毎週2回，神楽の稽古をすること，弟子後継者を作ること，学校の子供達に神楽の踊り，歌，太鼓を習わせることや，学生達を神楽（しんがく）や芸能会などに参加させること，（写真35，36，37）神楽に関わっている人々として，神楽に関する調査，記録をすること，ビデオや録音テープに神楽の舞方や歌い方など，細かいところを記録して残すこと，神楽に必要な仮面や服など，メンバーが準備することなどによって早池峰神楽は神楽保存会が主体となって保存を推進している。神楽に現実に関わっている人々は今日の社会ではどのようにして神楽の伝承や保存ができるのかということを考え，そのために様々な活動を行っている。その活動には，文化庁も協力している。

昭和35年に始まった大迫芸能保存会（大迫郷土芸能保存団体）は，神楽と共に大迫町の様々な村に広まっている民俗芸能や踊りなどのグループを奨励し，その伝統を人間の間に残すことを目的としている。毎年9月に大迫コミュニティ体育館で行われる“大迫町郷土芸能祭り”は大迫町教育委員会が主催している。入場は無料で，芸能グループには謝礼金が支払われる。今年で第38回目を迎えたこの祭りには26種類の踊りが参加した。

早池峰岳神楽後援会は，全国に散在している早池峰神楽の観客が集まった団体であり，主な目的は早池峰岳神楽保存会に資金援助によって協力し，早池峰神楽の伝統を正しく保特していくために交流会，公演会などを開くことである。メンバーから毎年会費として，1000円ずつ徴収する。平成9年11月30日現在，日本全国にメンバーは353名いて，早池峰周辺の人々や神楽ツアへの参加者や研究者などが主なメンバーとなっている。早池峰岳神楽後援会定期総会＝資料の平成10年度の活動方針によると，早池峰岳神楽の継承と保存に協力しておられる早池峰岳神楽保存会に対して，物心両面からの援助を更に強化する方策を探求すると共に，その実践推進を図ること，諸行事の開催，会報の発行，会員の拡大・名簿の発行等によって，早池峰岳神楽に対する関心の高揚と，正しい理解を町内外に広めていくと共に，会員相互交流親睦を図すこと，岳神楽保存会の後継者育成の資金援助をすると共に，本後援会事務局の役割休割の就実を図ること，岳神楽保存会と大局的見地に立っての大償神楽保存会との交流を進め，意思疎通を計りながら，相互に会運営の発展を図ることなどがある。事業計画には新春舞初め」の開催，会報「早池峰神楽」の発行，神楽保存会会員並びに岩手事務局員の「激励会」の開催，保存会各種活動の後援・資金，保存会・後援会員神楽同好者との「交流会」の開催，後援会員の拡大活動，その他例えば，ミニカレンダーの発行などである。

早池峰神楽鑑賞ツアー企画委員会は，平成2年度から始まったもので，毎年夏と秋の二回に分け，都会人を村に招き，3泊4日で早池峰神楽の美しさを体験させるプログラムである。神楽を通

して地場産品の紹介や全国や外国の人々とも交流を深める機会とする。具体的な目的として，早池峰神楽を広く紹介し，この神楽の本当の魅力を知らせること，大迫町の自然物を味わってもらい，互いの交流を促進すること，交流が地域の人々にとって良い刺激，啓発になること，地場産品の紹介の機会となることがあげられる。

プログラムを実行することによって目的を達成している。例えば，平成10年6月5日から7日まで行なわれた第17回目の早池峰神楽鑑賞ツアーのプログラムでは来客を大迫のワインハウス，産地販売センター，ミルク工房，ワイン工場，体験工房『森のくに』でのガラス工芸，まゆ工芸，七宝焼，手料理などで楽しませることによって地場産品の紹介の機会を作っている。神楽の資料・ビデオ見学，神楽の館で大償神楽の見学，早池峰神社の神楽殿で岳神楽の見学，神楽の研究者や関わっている人との交流を通して，神楽に関する興味を持たせる。また，早池峰山／登山口，観光バスによる地域の自然物見学などで大迫町の自然物を味わってもらい，互いの交流を促進すること。早池峰神楽鑑賞ツアーは現地の人々にとっても，都会の人との交流するための良いチャンスになっていると面接調査からも明らかになった。

> “近頃まで内川目村までのいい道路もなかったし，都会の人は誰も入ってこなかった。我々は都会人のこと殆ど知らなかったといってもよい。神楽が好きで最初にこの村に入った都会人は本田先生だと思います。それから神楽が有名になって我々は神楽ツアーのような活動を通して都会の人と交流することができた。神楽ツアーで知り合いになって都会の人と結婚した人もいます。”－伊藤。

早池峰岳神楽“春の舞”公演実行委員会は，大迫町教育委員会・早池峰岳神楽保存会と早池峰岳神楽後援会の協力で，毎年春に大迫町コミュニティセンターで公演会を開く。その団体の目的は，早池峰岳神楽“春の舞”公演実施計画によると，全国神楽大会の成功を受け，演目の多い神楽などの団体を中心として，郷土芸能のより一層の保存育成を図ること，早池峰岳神楽に対する関心の高場と正しい理解の深化，保存会員の継承意欲の喚起，および後援会会員拡大等の機会とすることし，大会の目的である“早池峰岳神楽の伝統の正しい保存継承”を図ることなどである。

大償神楽“初夏の舞”公演実行委員会は，毎年夏に公演会を開き，普段演じられることの少ない演目を演じる。それによって，忘れやすい演目を稽古し，伝承していくことを目的としている。早池峰こまどり会も神楽ツアーで集まる都会の人と村人の交流会である。

ガンマドヴァと神楽の背景となる村の組織には上述のように大きな差がみられる。ガンマドヴァの組織は神楽に比べて非常に少ない。カラーヤタナ組織には稽古や公演の先準備のために集めること以外の行動はみられない。つまり，定期的な稽古と単発的な公演に限られた活動であると言える。神楽の場合は，保存など決められた目的があり，それに合わせた計画や行動を行っており，行政機関の援助もある。スリランカの場合は行政機関が決めた方法によって民俗芸能などの存続においてわずかな援助がなされているが，神楽のように行政機関の援助を関係者の意見によって上手く使用する方法はみられない。つまり，神楽の場合は下から上への意志疎通が上手く行われ

ているが，ガンマドヴァではそれが上手くいっていない。その結果としてスリランカの民俗芸能の関係者は神楽の関係者のように自分の伝統をそのまま存続したいという気持ちがあっても，その目的にしたがって行動することができなくなっているのではないかと考えられる。

教育的活動

スリランカの学校教育では，中学校から高校まで伝統芸能の踊り，歌，音楽，などが選択科目として教えられている。しかし，民俗芸能に直接関わっている人によって教えられることは少ない。民俗芸能に関わっていても，必要な学校教育を受けていない場合，学校で教えることができないからである。伝統芸能に関する音楽や踊りを続けて勉強したい学生には，高校卒業後，ケラニヤ大学芸術学部（サウンダリヤ研究所）で学士が取れるようになっている。ここで学士を取った人は，学校で踊りや音楽教師になる可能性がある。サウンダリヤ研究所で学士を取ってガンマドヴァグループに入った人や，新しくガンマドヴァグループを作った学生もいる。写真（32）

日本の学校教育では神楽など民俗芸能や踊りに関する科目はみられないが，地方のある学校では放課後などを利用して学校の時間以外に民俗芸能の踊り，歌，太鼓などを稽古している。岩手県の大迫小学校と中学校では，岳や大償神楽保存会のメンバーによって学校始業前に神楽が教えられている。

岳神楽保存会は，神楽（しんがく）（写真33，34）や学生による芸能発表会（写真35）などを目的として学生に神楽を教えているが，学生からは神楽のグループに新しいメンバーを取り入れることはない。なぜなら，岳神楽は世襲制をとっており，長男によって伝承されているからである。しかし，大償神楽の場合は，現在学校で神楽を習っている中の学生達から，神楽を演じたい上手な人に神楽保存会に入ってもらう目的で，学校以外の神楽の館などで神楽グループのメンバーと共に稽古する。大償の場合は，近年「長男が都会に定住し，メンバーの減少傾向がみられるので，外部からでもメンバーを取り入れる必要がある」と現地調査で会長の佐々木隆氏は語っていた。岳神楽の場合は学生に神楽を教える目的は，子供たちの間に神楽など伝統に関して興味を持たせること（将来，村を離れていってもふるさとを持った人間になれるから，結果として神楽やふるさとを大切にする人になる。）と神楽（しんがく）や芸能発表会に参加させることである。

スリランカの場合は学校教育の科目として民俗芸能から選ばれた踊りが教えられているが，試験に合格することを目的にした一つの科目になっている。日本では民俗芸能に関する勉強は科目ではなく，学校始業前に教えられるものであり，学生によると，その目的は受験勉強から少し離れて楽しむことや興味などだということである。神楽の関係者の場合は学生に踊りを教えることによって弟子をつくること以外に現地の伝統文化に関する子供達の興味を深めることを主な目的としていた。この点からはスリランカの場合は民俗芸能に関する勉強は義務的なものになっているが，日本の場合は自由に楽しめるものになっているのではないかと考えられる。そのことも日本の民俗芸能がスムーズに存続している一つの原因ではないだろうか。

学校教育以外，民俗芸能の後継者の稽古を調べると，ガンマドヴァの場合は，伝統的なグルー

プ，カラーヤタナ（Kalayatana）という2通りの種類がある。

伝統的なグループというのは，踊り，太鼓，舞台装置などカーストによってガンマドヴァの役割ごとに組織化されたグループである。稽古においては，特に踊りや太鼓のグループが関わっているが，舞台装置の役割を果たすグループの稽古は見られない。踊りのグループは神社を中心に行動したが，現在では神社との関係がなく，組織化された踊りのグループもいる。しかし，そのグループの中には，神社のカプマハタもいる。稽古は自分の家を中心に行われ，メンバーの取り入れ方も自由である。

カラーヤタナというのはカーストとは関係なく，集団でガンマドヴァなど民俗芸能を行う組織である。1950年代から始まったカラーヤタナは，民俗芸能の後継者家族を中心に構成されている。社会変動と共に，低い社会階層（カースト）の人によって分担された太鼓や舞台装置の協力が少なくなったことが，カラーヤタナの始まりの原因となったのではないかと考えられる。稽古するために特別な会館やリーダーの家を使用し，村人に踊りを教え，その中から，教師を育成する。新たにカラーヤタナをつくり，民俗芸能に関わっているケラニヤ大学芸術学部（サウンダリヤ研究所）で学士を取った人々もいる。

早池峰神楽の場合は，神楽保存会という神楽を踊るメンバーの組織がガンマドヴァのカラーヤタナ（Kalayatana）という組織に相当する。岳神楽はメンバーに対する稽古を週に2回行っており，そのために神社の会館や自分の家が使用されている。岳神楽は弟子神楽のグループを70ぐらい持っている[xxiv]が，保存会（母グループ）には，代々から神楽を続けてきた長男しか新メンバーとして取り入れず，強い世襲性が守られている。

稽古については大償神楽の場合も同様に，週に2回行っており，神楽の館や民家が使用されている。後継者は最近まで長男だったが，現在，大償部落の多くは都会に勤めているためメンバーが足りず，家族以外からもメンバーを取り入れるようになっている。しかし，早池峰神楽の後継者の稽古に対する面接調査によると，大人の後継者の間には若者の稽古を誉める人はあまりいなかった。

> “神楽の稽古というのは，その周りの環境と同様に身につけていくものです。畑や山仕事に関わりながら毎日稽古した昔と，今は随分違っています。一日中椅子に座っている公務員ので固くなった体を，このような僅かな稽古で神楽を舞うのが難しい。”山本清志72歳

このようにカラーヤタナ組織は神楽保存会に表面的に相当するが，それらの形成や活動は違っている。世襲性が守られていて長男の義務あるいは“ご先祖様のものとして守り続けていきたい”－（1998現地調査より－小国朋身）という強い気持ちが大きなちがいである。経済発展と共に職業の関係で長男が都会に出ることによって世襲性が弱くなっていることは大償神楽から分かるが，岳神楽の場合はまだ世襲性の重要性が保たれている。

行政機関の活動

スリランカの民俗芸能の保存に関わっている行政機関は文部省，文化庁の2つがあげられる。文

部省（Ministry of Education）は，小学校から大学卒業まで民俗芸能などに関する音楽，歌，踊り，などを科目として教えられる教育制度，音楽，歌，踊り，などに関する教師を研修させる研修センターの運営，ケラニヤ大学芸術学部（サウンダリヤ研究所）で研究者や後継者を育てることなどに関わっている。

文化庁（Ministry of Cultural Affairs）は，分布しているカラーヤタナ，個人的に後継者を育てている民俗芸能などの関係者金や楽器などで援助すること，伝統文化活動に関わっている人々をカラープーシャナ　やカラーシューリなど（日本の文化勲章に当たる）として表彰すること，民俗芸能に関わっている人々を軍隊の太鼓グループに勤めること，S.L.B.C.スリランカ放送局による伝統的な踊りや歌などを録音し，残す活動，外国で開かれる後援会などに招待された場合は，ガンマドヴァなど民俗芸能を参加させること，国民が代表する祭りには民俗芸能を参加させることなどに関わっている。

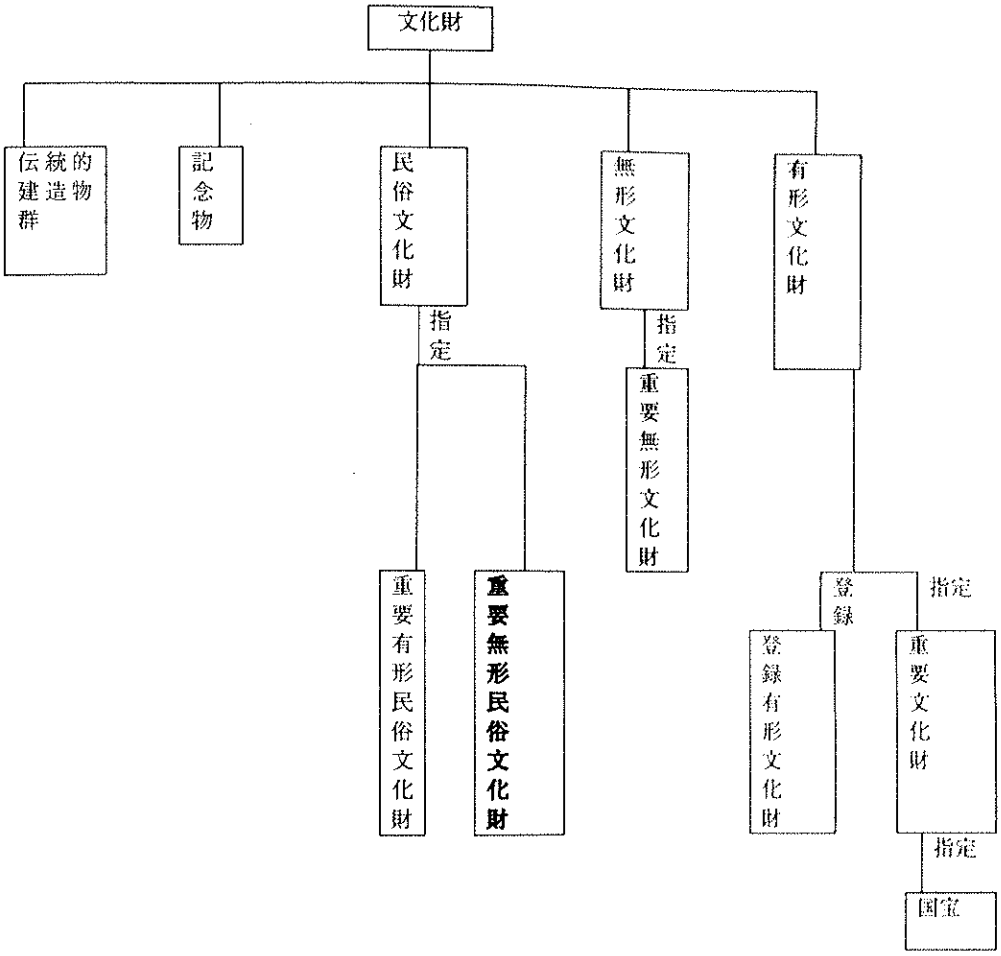
スリランカでは民俗芸能において行政機関の活動は日本とも共通するようにみえるが，民俗芸能の存続においての効果は非常に少ない。その原因は第4章で検討されるガンマドヴァと神楽の背景にみられる経済的や社会的な差ではないかと考えられる。

神楽と関わっている行政機関

日本の文化財保護政策は文化庁を中心として展開されている。文化財保護制度自体は明治時代にはじまるが，今日では保護の対象も拡大され国と地方公共団体が連携して有形・無形の文化財保護にあたっている。また，今日では広く国民の文化財保護への関心を高めるために資料の公開や文化財活用を呼びかけている。

文化財の対象は「有形文化財」,「無形文化財」,「民俗文化財」,「記念物」,「伝統的建造物群」として大きく分類されており，本論で取り上げている早池峰神楽は「民俗文化財」中の「重要無形民俗文化財」として指定されている。参考までに分類の体系を表11に示しておく。

表 8　文化財の分類体系



「民俗文化財」とは人々の生活の中で育まれ継承されてきた有形・無形のものからなる。衣服，住居，年中行事や早池峰神楽のような民俗芸能もこの中に含まれる。したがって，これらの文化財は特に地域の生活と密接なつながりがあるため，その保護には地方公共団体の役割が大きくなる。文化庁も地方公共団体の行う保存・伝承事業に対する助成などを通じて協力を行っている。

では，早池峰神楽の場合はどのような事業がなされているのか具体的にみてみたい。

(1)　大迫町教育委員会を通して村落レベルの組織を援助すること。例えば，早池峰岳神楽保存会と大償神楽保存会に資金援助を行っている。また岳村では早池峰神社の隣に神楽に関する博物館を建造し，大償村では神楽の館を建造している。

(2)　大迫町教育委員会を通じて村落レベルの民俗芸能などを保存伝承するために村人を組織化している。そのような組織として「神楽保存会」，「大迫芸能保存会」，「早池峰岳神楽後援会」，「早池

峰岳神楽“春の舞”公演実行委員会」,「大償神楽“初夏の舞”公演実行委員会」などがあげられる。

(3) 大都市周辺で民俗芸能の公演を主催し，都会の人々に対して伝統文化に関する興味を深める。

(4) 海外公演の機会などで早池峰神楽を日本の民俗芸能として代表で参加させる。

以上のように村レベルでの組織化や保存事業の支援とともに神楽を広く国内，国外に宣伝していくといった活動が国と地方公共団体の協力によって推進されている。このことは神楽を単に保存する以上に，村人や公演を見に来た人々に伝統芸能を尊重する意識を持たせることに大きく貢献していると考えられる。

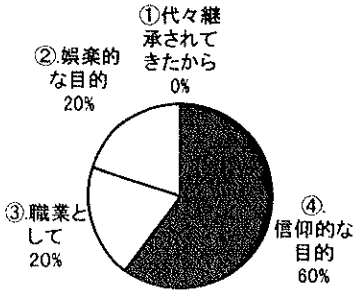
Ⅳ　伝承に関わる問題

いつの時代も社会変動と同時に，それに伴う民俗芸能など文化的なものも変容したり消滅したりする。しかし，我々の時代において，文化的なものの消滅の原因またはそれを防ぐための努力の背景は，以前より複雑になっているのではないかと考えられる。この問題を経済的，社会的，宗教的という3つに分けられる。

日本と比較すれば，スリランカにおける経済的な問題が民俗芸能の存続に大きな影響を与えているといえるだろう。

ガンマドヴァは，以前は行なう人にとって生活手段ではなかった。彼らは普通の農民であり，収穫後，招待された所で，村人が集まり，神々に感謝し，五穀豊穣や無病息災を願うためにガンマドヴァを行なった。現在では，様々な職業に関っているガンマドヴァの関係者が，神楽と違ってガンマドヴァから離れつつある。代々家族で継承されてきたが，現在ではそのような世襲の家は少なくなり，ガンマドヴァだけでなく他の神々や悪魔に関する祭りを行う職業的なグループになった。そのグループの人達がガンマドヴァ，デオルマドア，パーンマドア，プーナマドアなど，神々に関する行事やサンニヤクマ，スーニヤムヤクマ，マハソホンサマヤマや，悪魔に関する行事などを職業として行なっている。彼らは，招待される側に合わせて祭りや行事を行う。最近まで，スポンサーや招待される側からもらえる穀物や，金で満足したが，現在では注文される踊りや演目の数によって決まった値段を指定するグループもある。多くのグループが職業としてガンマドヴァを行い始めてから，ガンマドヴァの形態が変わってきた。特に，ガンマドヴァを行う目的は，娯楽的な部分が取り除かれ，神々から安全や無病などを願う信仰的な部分が大きくなっている。そのことから人々の不安の高まりと共に関係者が宗教的に権威も持ちつつあるということが伺われる。それは，関係者に対するアンケート調査でガンマドヴァに関わっている理由は何かという質問に対する答えからも明らかである。(図6参照)

図 6　関係者がガンマドヴァに関わっている理由
アンケート調査における具体的解答例
① 代々，伝わってきた我々の伝統だから
② 踊りや音楽に関わるのが楽しいから
③ 職業として
④ 人々を危険や病気から守ることができるから



このようにガンマドヴァだけでなく，他の様々な民俗芸能や行事の中から，それぞれの芸術的な部分を捨て，信仰的な部分も即物的な面で超自然的なサポートをもらえると思われる部分だけになってしまい，スリランカにあった個性ある様々な民俗芸能や行事は同質的なものになりつつある。

"私はどんなビシネスを始めても盛んになるのは神々が私を守ってくれるからです。だから私は毎年ガンマドヴァのオーガナイザーに協力し，参加します。" ーキトシリ45歳

"神々に対する信仰が薄くなっているから現在，我々の子供達がたくさん戦争で死んでしまったりしています。ガンマドヴァなどがますます増えればそう言うことは起こらないんです。" サイマン50歳

観客への面接調査によるとより物質的な豊かさを求めることや現状への不安などが人々をガンマドヴァなどに向かわせているのではないかと考えられる。それによって民俗芸能は国民が直面している不安な状況や個人的な問題を解決することを目的にすることによって娯楽的な性格がなくなり，より信仰的になり，性格が変わっていったのではないかと考えられる。こうして本来多くの民俗芸能が持っていた独自性が失われ，民俗芸能そのものが崩壊していると考えられる。

早池峰神楽の場合，関係者は戦前神楽だけで生活してきた。年に3回行われる早池峰神社の祭り以外に村落で稲を取った後，その感謝のために早池峰神を表す権現様を村落に招き，行われる門打ちという行事があった。写真 (20) そこでは，神楽の舞手によって悪魔祓いや，清めの祈祷が行なわれた。家々を回り，悪霊を追い払い，約2ヶ月間行われる門打ちで得られる穀物や食べ物は，神楽グループやその家族の年間の生活に十分な量だった。

現在神楽は，年に3回行われる祭りだけになり，門打ちがなくなった。原因は戦後神楽に関わる人が減ったことである。したがって，神楽の人の生活手段が，神楽から他の職業に変わった。しかし，そうなったとはいえ，早池峰神楽は消えてはいかなかった。現在では，神楽に関する公演やイベントが多くなっている。岳神楽だけで年に60回ぐらい，イベントに参加している。ー（祈祷師による面接調査1998年の小国朋身40歳）休日は公演やイベントに参加し，平日は職業に関わることになった。神楽は年中行事として人々の生活に密着したものからイベント化することによって生き延びたのである。

現在神楽を行うグループは，神楽保存会である。公演やイベントでもらえる礼の金（花）の1/3は，保存会の運営のため貯金し，2/3は保存会のメンバーに分配される。早池峰神楽が国の指定を

受けてから毎年約5万円の補助金も貯金され，その貯金から舞手の着るものや様々な道具を買うことや公演の準備金がまかなわれる。このように神楽を行うことによって，祈祷師がもらえるのは僅かな金額になり，神楽は生活手段という意味から離れていった。

現在早池峰神楽の後継者の多くは大迫町の役場や村に近い行政に関する職場に勤めている人である。なぜならば，神楽保存会のメンバーであることは，大迫町の役場や村に近い行政機関に就職する際に有利な条件になっているからである。彼らは就職のために神楽を続けているわけでは決してないが，このシステムは行政側が神楽を存続させる手段として一定の役割を持っているとも考えられる。このような社会変動に伴って，以前の生活手段として信仰を中心に行われてきた神楽が，現在では興味あるいは娯楽を中心に行われることになった。それが，（図7）で神楽の関係者に対するアンケート調査でも伺える。

図 7 関係者が神楽に関わっている理由

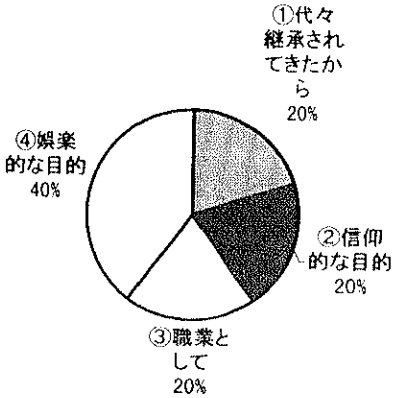
アンケート調査における具体的解答例

① 代々，伝わってきた我々の伝統だから

② 人々を危険や病気から守ることができるから

③ 職業として

④ 踊りや音楽に関わるのが楽しいから



"神楽がなくても食っていける"（祈祷師による面接調査1998年の小国朋身氏）と言いながらも，一生懸命神楽の稽古に励んでいる理由は何なのか。その原因は神楽で生活できなくなったというよりも，生活を豊かにできる手段が村落に入ってきたからではないだろうか。公務員日々の忙しさにも関らず，暇がある時稽古し，祭りかイベントに参加している理由は，副収入になるからではなく，代々から伝わってきた誇りを自分のものにしたいという考えが生じているからのではなかろうか。

"神楽と言うのは，我々の先祖代々から続けられてきたものです。長男であって，我々の責任です。現在国の指定を受けて，神楽は日本を代表するものとして誇りを持っています。全国から外国からも人々がこの村に入ってくる理由は神楽です。我々を外国にまで招待し，日本のものとして神楽を見せる時，我々日本人のものということをお金より大事にしていきたいと考えます"。―祈祷による面接調査 1998 年―小国朋身 40 歳

社会的な問題，特にカーストの差がスリランカの民俗芸能の存続に影響を与えたもう一つの問題である。このような現状の中で，ガンマドヴァや他の民俗芸能に関っている人々はシンハラ文化による様々な階層の人に含まれている。ガンマドヴァにおける様々な役割を果たす人々もカーストに分かれているのである。（表10）

表 10　ガンマドヴァにおけるカースト

上位カースト	舞手ーゴイガマカースト
	太鼓奏者ーネカチカースト
	飾りをする人ーベラワカースト
	必要なお菓子など食べ物を作る人ーヴァフンブラカースト
下位カースト	祭場飾るために必要な布など用意する洗濯屋ーラダーカースト[xxv]

現在まで，シンハラ人は，社会行動における自分の役割として，その階層を扱っていた。自分が低いカーストにいるということが分かっていても，それが社会において自分の役割を表す当たり前のことだと考えていた。しかし，社会変容と共にそれが自分の生まれによって決められるものではなく，社会によって決められた差だという考えが広まった。そして，カーストの低い人は自分のカーストを隠すために，名字を変えて引越しするなどの努力をした。現在のシンハラ社会では，表面的にはカースト制度を気にしないように見えるが，その役割は今なお機能している。

このようなカースト制度は現在スリランカの民俗芸能の伝承保存に悪影響を与えていると言える。ガンマドヴァなど民俗芸能を行う人々は，祭場以外のあらゆるところで，自分が民俗芸能に関わっているということを隠すため努力した。

"舞手は仮面や服などを鞄にいれて祭場ま行けるが，我々太鼓奏者は太鼓を見えないように隠して持っていけない" ーグナシリ Gunasiri（26 歳）

例えば，現地調査で，自分の子供たちを民俗芸能に関わらせまいとする人達や，ガンマドヴァに関わっている自分の父親を止めさせようとしている若者にも出会った。

早池峰神楽の場合は，社会階層の差はみられない。神楽の人達は，村落の五穀豊穣や無病息災を叶えてくれる人であると同時に，全国的にも，国際的にも村落を有名にしてくれる人である。

"近頃まで，その辺りはほとんど田舎だった。神楽のおかげで内川目村が有名になって，都会人や外国人まで田舎に入って来ることになった。我々は国際的交流ができた。"ー伊藤寿一（60 歳）

その点でも，神楽がガンマドヴァと違って，人々の尊敬を受けている。そのため，自分が神楽の関係者だということを自己紹介とともに付け加える人が多かった。彼らの名刺にも神楽の踊りの写真を描かれてあったことが例としてあげられる。（写真 38）

外国の影響

スリランカは，1505 年から 1602 年まではポルトガル，1602 年から 1815 年まではオランダ，1815 年から 1948 まではイギリスからそれぞれ植民地支配を受けていた。そのために起こった様々な社会的影響によって，数多くの民俗芸能が消えてしまった。スリランカが何カ国にも植民地支配さ

れたことによって，スリランカ人が精神的に受けた影響は大変大きい。特に1815年から1948年まで133年間イギリスの植民地になっていたことから，イギリス人は尊敬されるべき存在であり，西洋の文化を取り入れることによって自分も尊敬されようとする努力が一般人の一つのスタイルになった。植民地支配で西洋文化や英語が重要視されるようになり，特に都会の学校では小学校から英語教育が重視され，英語のできる人は管理職になり，社会的にも尊敬を受け，新しい上層階級ができた。これにより，シンハラ語とシンハラ文化を大切にしている人々が，下級の人々として軽視されるようになった。そのため，母国語で簡単にコミ'ニケーションができるのに相手が分からなくても無理やりに英語で話しかける人も見うけられる程である。近代の科学や教育を受けた新しい世代の若者はスリランカの文化を忘れ，祭や民俗芸能よりもイギリスの植民地下の影響によって流入した英語の演劇，映画やテレビドラマなどに熱中し，祭り等の立役者として尊敬された人々が疎んじられるようになった。このように，スリランカの国民文化や独自性に関する意識は人々から失われていった。現在では，ガンマドヴァなどを時間や金の無駄として扱う人が多くなった。民俗芸能に関わっている人々は，社会的に批判され，結婚相手として選ばれなくなった。

以上の背景からスリランカの伝統文化の衰退は明らかだが，早池峰神楽に関する人々は，村や地域の人々からだけでなく，全国的にも尊敬されているようだ。以前神楽の人達は，神々と人間の間を交流し，村落の五穀豊穣や無病息災を叶えてくれる重要な人間として尊敬を受けていた。現在では，それに加えて独自な文化を伝承し村や町を有名させる人々としても尊敬を受けている。

ガンマドヴァの存続には宗教的な問題も影響を与えている。ガンマドヴァは，パッティニという神を中心に，収穫後神々に感謝し，又神々を願うために行われる行事であるが，1980年代になると，ガンマドヴァの中心になっていたパッティニ神の変更が見られ，パッティニ神よりカタラガマという神が中心になった。スリランカの民俗信仰によると，神々は将来仏陀になるために努力をしており，仏陀になる順番が近づくにつれて，それぞれの神々と人間との関わり，人間を助ける力が薄くなる。その理由は，仏陀になるための行動に夢中になるからである。以前力の強いパッティニ神も上述の理由で弱くなっていったため，仏陀になる順番の後方にいた力の強いカタラガマという神に願う人が多くなっていった。

この状況によって，ガンマドヴァからパッティニ神の重要性が少なくなり，カタラガマ神中心になった所が多い。そのことを理由として，ガンマドヴァの中に演じられたパッティニ神に関する物語は演じられなくなった。また，以前ガンマドヴァの中ではパッティニ神が大変尊敬を受けたが，1998年の現地調査では4つのガンマドヴァうち，3つでのパッティニ神の踊りは人々にあまり尊敬されなかった。パッティニ神舞には，以前なかった笑い話やセックスの言葉が多く，観客から笑いをさそう場面が多かった。

ガンマドヴァの主な神がパッティニ神からカタラガマ神に変更されたと同様に，90年代では村人の主な願いによって別の神々も中心になった地域がある。そこのガンマドヴァの構成も変わり，個性もなくなっている。例えば，1988年から始まったGampaha地方のMapitigala村のガンマドヴァ

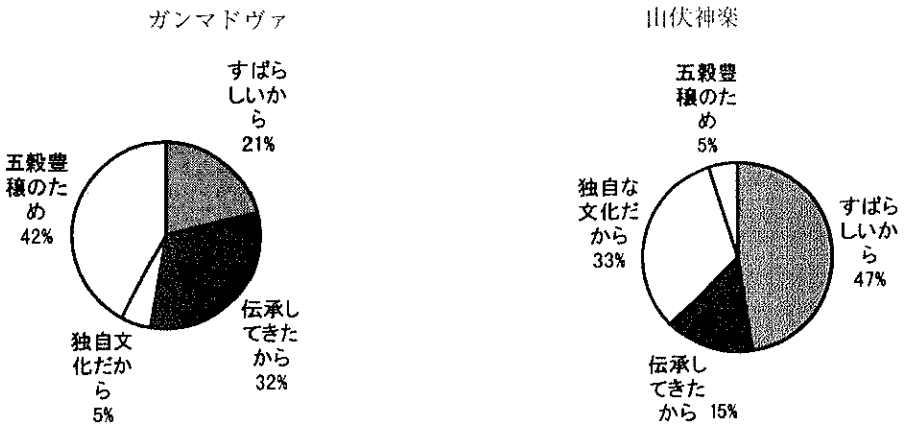
はスーニヤム神（悪い行いをした人間に罰与えること主にしていると思われる神）を中心に行われる。

ガンマドヴァに関する信仰性の変化もその存続に影響をあたえた。スリランカのガンマドヴァや日本の神楽が，現在まで伝承されてきた主な原因は，神々に対する信仰だと考えられる。日常生活の必要条件を願い，神々を楽しませるために，このような民俗芸能が行なわれた。自らコントロールできない自然を神々として扱い，その神々を祭り，楽しませることによって，自分が好きなように自然をコントロールする力がもらえるという考え方が，先住民の頃からあったものである。

早池峰神楽の悪神退治舞では，悪魔を追い払うことを真似し，舞うことによって村落の人々に関する悪い影響を追い払うことを期待する。山伏の黒森神楽と早池峰神楽の戎舞の「魚取り」舞は，漁村の人が大漁を願う舞である。

パッティニ神を中心に行われるガンマドヴァでは，パッティニ神によって悪魔を追い払い，村や地域を清める場面がある。ガンマドヴァと山伏神楽は人間の信仰的な願望を実現させてくれる手段として現在まで守り続けられてきた。ガンマドヴァには現在でも信仰的な面が重視されている。しかし，現在の神楽には信仰が重要視されているという徴候はみられない。アンケート調査を元にした以下の表からこのことが明らかになる。ガンマドヴァと山伏神楽の被験者全てがなぜ民俗芸能を伝承していきたいのかという質問への答は（図8）の通りである。

図 8　なぜ民俗芸能を伝承していきたいのか

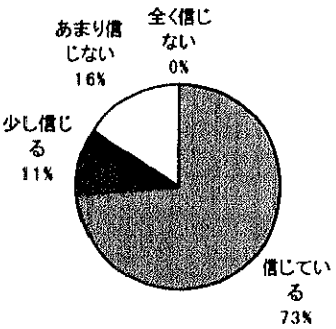


ガンマドヴァの場合，信仰的な側面で守り続けていきたいと言った人々の割合が42%を示しているが，神楽の場合は5%である。しかし神楽の場合は，社会的な面で，例えば独自な文化として，あるいはすばらしいから伝承していきたい人々の割合が比較的に多い。

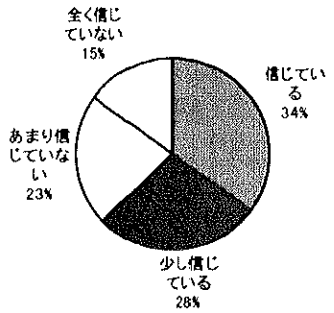
民俗芸能を行うことや見ることによって自分が神々から守られると信じているのかという質問に対する答えは図9の通りである。

図 9　関係者や観客の信仰

ガンマドヴァ



山伏神楽



信じている人々の割合が，ガンマドヴァと神楽の両方とも多くなっている。一方で，ガンマドヴァの場合，神楽より多く，73%の人が信じているということが分かる。

民俗芸能の背景には民俗信仰が主に関わっているということが明らかであるが，以上のアンケート調査結果から，神楽の現在を通してみると，信仰というのが民俗芸能の伝承に直接影響を与えているとは言い切れない。なぜかというと，神楽は信仰から離れても伝承されているからである。しかし，「神楽は信仰から離れると，歌舞伎みたいなショーだけになってしまう。」という小国朋身氏の意見は，神楽を信仰を含めた民俗芸能として守り続けていきたい意思を反映している。その伝承は，ビデオテープによる録音，本などでできることではなく，信仰を含めた気持ちで，村の生活環境の中から，身体から身体へと伝えられていくものであるという意識は強い。「神楽は現在伝統芸能として公演やイベントに参加することはあるが，地元の神社では民俗信仰に基づき，本来の不安の姿を表したいと願う努力によって表現されるものが，真の民俗芸能である」との答えが返ってきた。

日本と比べると，スリランカに残っている民俗芸能からまだ伝統芸能という形のものが形成しなかったことそれらの減少の理由になっているのではないかと考えられる。民俗芸能というのは民俗行事としてあるいは民俗行事の中に行なわれる芸能だと言われている。民俗芸能はもともと信仰によって行なわれてきたものなので古い時代の面影をとどめたものが多く残されている。年に一度，二度あるいは数度など決まった時期に行われていることも特徴である。民俗芸能にはいつの時代からか人から人へ伝えられて続けてきたものが多いのでその土地なりの性格がみられる。

私は伝統芸能というのは民俗芸能や民俗行事をもとにしてその要素を取り入れながら新たに作られたものであると考えている。娯楽的な目的を中心にしているので芸術的なものにもなっている。また行なわれる時期が決まってない伝統芸能を演ずる人も専門家である。あるいは経済的や社会的発展と共に独自なものや国民文化として新たに作られたものである。

早池峰神楽に対する人々の信仰が薄れていったことから，神楽の娯楽性が目立つようになっている。同時に，神楽は自分の村のもの，あるいは国の誇りとして考えるようになり，その意味で

今日では保存伝承が推進されているのではないかと考えられる。

戦後，神楽の関係者の減少や経済的な理由によって，門打ちが行われなくなった。現在，信仰的の名残がある神楽は，舞初め，夏祭りと舞修めだけではないかと考えられる。一方，今日では，神社以外の都会や海外でのイベントや公演会が増加している。それは地元の神社で行なう信仰性を主にした民俗芸能ではなく，独自なものを代表する伝統芸能として参加している。社会変動の中での民俗芸能が伝統芸能へと変容していく事態は，他のアジア諸国にもみられる。又，多くの諸国の演劇の背景にも民俗芸能，祭儀や儀礼などがみられることによって，社会変動の中で民俗芸能は伝統芸能に質的変化をとげ，最終的に日本の能のような独自の演劇の形態を創るエネルギーになりうる可能性があるのではないかと考えられる。

伝統芸能化されるというのは早池峰神楽を例にして調べると，地元から（神社）離れて行われるということ，民俗芸能段階で行なわれた演目が減少すること，現在社会を喜ばせることのできるものを残し，他に新たなものを加えること，時間の短縮化などと見なすことができる。

このように山伏神楽の姿が信仰性の深い民俗芸能という立場から信仰性が薄くなった娯楽性や芸術性が目立つようになりつつある。それは現在日本社会の必要性に応じた変化かもれないが，神楽の形式や舞い方に対してその変化は直接影響を与えたとは言えない。

おわりに

ガンマドヴァと山伏神楽には様々な共通点が現れたが，逆にそれらの現在に至るまでの変容の要素にはいくつかの相違点も見られる。その相違点は経済発展や教育という外的な要因と両者の構成や信仰性という内的な要因として大きく2つに分けられる。

日本はスリランカに比べて経済的に大変発展している国である。それによって日本人は比較的に忙しくなり，生活は都市化や工業化している。しかしそのことも逆に昔の伝統を楽しむことに日本人の方向を付けたのではないかと考えている。

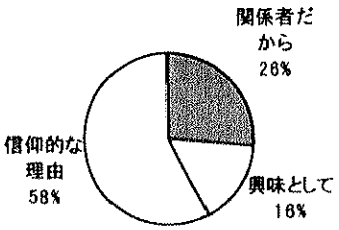
早池峰神楽の観客の約40％が東京や周りの都会からの人で，約40％が周りの村の人で，約20％が村の人であった。早池峰神楽を見物するために都会から来た人々との面接調査によると，忙しい仕事や都市化に疲れているので故郷の温かさに囲まれた日本の伝統を楽しみたいと答えた人のほうが多かった。

“私の実家は青森県で，東京渋谷に住んでいます。私は毎年実家のお祭りと早池峰神楽を見に行きます。東京は便利ですから実家に帰りたくないけど，心のリラクスするためには半年に一回でもこういうものをみながらゆっくりしたい。神々は信じていません。”田中順子（36歳）

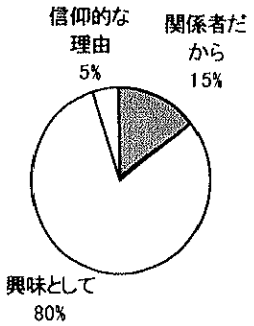
ガンマドヴァの場合は楽しむために見物する人の数は少ない。見物人の多くは信仰的な目的を持っていた。例えば，子供の無病や安全，自分や家族の安全，無病，幸福や営業や農業の作成を願うことやそのような目的を探ってもらったために神々に感謝し，お礼を備えることなどである。アンケート調査結果でのなぜ見に行くのかという質問への答えを比較すると図10の通りまとめられる。

図 10　なぜ民俗芸能を見に行くのか

ガンマドヴァ



山伏神楽



このように，現在ガンマドヴァの場合は日常生活の様々な問題を解決することを目的として見物する人が多くみられるが，山伏神楽の場合は逆に娯楽のために見物する人の数が多い。

日本では，神楽に関する信仰性が薄くなり，娯楽性が高まっている傾向が見られるがスリランカでは逆に娯楽性が薄くなり，信仰性が高まっている傾向が見られる。ガンマドヴァにおける35の演目は現在では殆ど行われなくなり，行事的な部分の全てが行われることによって信仰的な性格が目立つようになっている。その原因は何なのか。スリランカのガンマドヴァの観客の多くは日本のように豊かな世界に住んでいるものではなく，日常生活での困難な状況や不安に囲まれている。その点でガンマドヴァは，彼らにとって娯楽的なものというより日常生活の問題に助けを求めるものになっているのではなかろうか。また娯楽性を持つ物語の部分を演じられる35の演目の重要性がなくなったもう1つの理由は，映画，演劇，テレビドラマなど多くの娯楽が広まっているからではないかと考えられる。

しかし日本では娯楽が多く広まっているのにも拘わらず，神楽の娯楽性が重要視されている。現在の日本人は他にも多くある娯楽的な手段とは別のペースで神楽を楽しめるのである。それは神楽の原形を留めたいということも関係する。これは，(注56) 神楽保存会の目的，神楽鑑賞ツアー企画委員会の目的，"初夏の舞"公演実行委員会の目的などによっても分かる。そして，豊かになった日本人にとって神楽はスリランカのガンマドヴァのように生活の困難に助けを狙うものではなく，伝承として尊重する対象として，またふるさとの静かな楽しみを味わう対象としてとらえられているのではないかと考えられる。

教育的にも日本とスリランカには大きな差が見られるといえる。最初にスリランカの文化的な様相を理解しようとしたのは西洋の学者たちであり，その研究は文明人が未開の文化を調べるようなものであった。イギリスの教育を受けたスリランカの学者達も西洋の大学で西洋の学問を学び，その方法に基づいてスリランカの文化を理解しようとした。その研究も西洋の学者達の研究とあまり変わらなかった。そのことを原因としてスリランカでの教育を受けた人や一般の人々の間ではガンマドヴァなどスリランカの伝統に対して田舎くさい無駄なものだという印象を持って

いる人が多かった。

日本では西洋的な研究と同時に明治維新後，日本民俗学という独特な研究も発展してきた。柳田国男のような学者達の導きによって研究を始めた学者達が全国分布している。日本の学者達による民俗学的な研究は日本文化の存続において与える影響は非常に大きいのではないかと考えられる。例えば，早池峰神楽に関する詳しい研究を始めた本田安次氏の研究は早池峰神楽の存続や全国や外国まで有名になる原因になったと言われている。

"早池峰神楽が有名になった原因は本田先生の研究だと思います。車もない道路もよくない戦前から早池峰に入って戦後にかけて東北の山伏神楽と番楽に関して詳しく調べて立派な本を書きました。この研究を続けていく生徒達も多く育ちました。だから早池峰神楽は全国や外国まで有名になり，国の重要無形文化財の指定を受かった。早池峰神楽の存続のために本田先生の協力は非常に大きい。" ―佐々木隆氏（69歳）

また，今日ではビデオ・テープの普及によって，民俗芸能を映像によって記録する方法が定着してきている。例えば，静岡県は，このビデオ作成にあたって制作委員会を設けて民俗芸能研究者を取り込み，ここで台本作成してビデオ会社に委託し，研究者が作成の現場に立ち会うという形を取っており，ビデオの他にガイドブックが付けられている。さらにこの静岡県の試みは周到で，芸能の準備から後片付けをもれなく記録したものとダイジェスト版との2種を作成し前者は伝承に役立てるために用いている。博物館も，近年では独立したビデオブースを作るなどして来館者が自由に視徳できるようにしている。また民俗芸能を中心にN.H.K放送局の「ふるさとの伝承」も，1997年4月から始まり，民俗芸能の保存に大きな手がかりになっているのである。要するに日本では民俗芸能は，『映像民俗誌』の時代に入っているといえる。

また，文化庁は1989年から各都道府県教育委員会に国連補助金を交付けし，都道府県別の『民俗芸能緊急調査』を実施している。なお，文化庁は『民俗芸能緊急調査』と同じく『祭り行事調査』も同様に実施している。出版社おうふうが刊行している都道府県別『祭礼行事』『祭礼辞典』なども，全国的な県別民俗誌の一つである。このようなものは先にあげたN.H.Kの「ふるさとの伝承」と共に日本の民俗芸能の伝承保存に与える影響は非常に大きい。

このように日本では教育を受けた人々の関わりによって，神楽などを含めた伝統文化が政府からも重要視されており，そして，村人，全国や外国の人々まで重要視されるものになっているのではないかと考えられる。それによって見る側も自分の文化を代表するものとして神楽を大事にした。あるいは自分の歴史上のものとして味わった。行なう側が以前地方の観客だけに限られていた神楽が研究者や政府によって有名になり，日本を代表するものまでになったことをきっかけに経済的な利益がなくても神楽を大事にしなければならないという意識を持つことになっている。

"我々が伝承している神楽は国のものです。国を代表するものです。大迫を有名になったのは神楽があったからです。現在では神楽の大迫になっています。だから我々は誇りのあるものとして神楽を大事にして伝承しています。" ―小国朋身40歳

また，大学や民俗博物館による民俗学的な研究の発達も日本の伝統文化の重要性が全国に認識さ

れるものになっている。

スリランカでは民俗芸能が数多くあって消えつつあるが，それらの一つだけでも詳しく検討された研究はみられない。教育を受けた人々からもスリランカの伝統文化を疎んじられ，政府や一般の人々からもそれらの存続に向けての動きが始まっているとは考えられない。またそのような伝統文化に関わっている人々の減少にもこうした問題がもう一つの原因となっているのではないかと考えられる。

内的な相違点に関して私はガンマドヴァと神楽の構成や内容に現れる信仰性の違いに着目したい。そしてガンマドヴァと山伏神楽を構成している演目比率を調べることによってこの違いを明らかにしようと思う。そのためにガンマドヴァと山伏神楽における演目をそれらの内容に現れる信仰性によって，信仰性の強い行事的な演目，信仰性の弱い娯楽的な演目，信仰性のない娯楽的なイベントという3つに分けることにする。

信仰性の強い演目というのは五穀豊饒や無病息災を願うことを目的とした娯楽性のない行事である。例えば，ガンマドヴァを行う前に仏陀や神々に許可をもらうために行われる行事，神々や悪魔などをガンマドヴァ場に招待する行事，神々や悪魔に供える行事，幸福や安全など祈りの行事や清めの行事などである。山伏神楽では信仰性の強い演目として権現舞があげられる。権現舞では五穀豊饒や無病息災を祈る行事や清めの行事が行われる。このように，神々や悪魔あるいは祈祷師が登場し，祈願することを中心とした行事を信仰性の強い演目とする。

信仰性の弱い娯楽的な演目というのは，神々や悪魔は登場するが，祈願など信仰的な内容が少なく，観客を楽しませるような内容のものである。このような演目では演劇の要素が多く含まれており，冗談や笑い話が多い。ガンマドヴァの場合は，神々だけでなく悪魔も登場し，踊り，観客を笑わせる冗談を言い，最後に清めの行事を付け加えられる程度である。

信仰性のない娯楽的なイベントというのは，ガンマドヴァの「ピヌムタラガ」（アクロバティックな踊り）と神楽の狂言などである。観客を楽しませることだけが目的で，神々や悪魔もほとんど登場せず，祈願も行われない。

ガンマドヴァと山伏神楽はこの3種類の演目によって構成されている。しかし，それぞれの重視する演目の比率が異なっている。そのため，ガンマドヴァと山伏神楽の様相が異なるものとなっている。

現在スリランカで行われたガンマドヴァの順序の例（表3）と早池峰神楽の順序の例（表5）を調べてみると3種類の演目の比率が（表11）と（図11）の通り比較できる。

表 11　ガンマドヴァと山伏神楽の演目様相の比率

	合計	ガンマドヴァ	合計	山伏神楽
信仰性の強い行事的な演目	20	【1】【2】【3】【4】【5】【6】【7】【8】【9】【10】【11】【12】【13】【14】【15】【19】【23】【24】【26】【27】	1	【12】
信仰性の弱い娯楽的な演目	6	【16】【18】【20】【21】【22】【25】	8	【1】【2】【3】【4】【5】【6】【8】【9】
信仰性のない娯楽的なイベント	1	【17】	3	【7】【10】【11】

表11によるとガンマドヴァにおける信仰性の強い行事的な演目の数は27の全演目のうち20を占め，74%を示しているが，山伏神楽は12の演目中1つしかない。信仰性の弱い娯楽的な演目の数はガンマドヴァの場合は全演目の22%しか示していないが，山伏神楽は67%を示している。信仰性のない娯楽的なイベントはガンマドヴァでは全演目中，1つしかないが，山伏神楽では全演目の1/4を占めている。

このように演目ごとの性格に着目すると，両者の構成上の違いが浮かび上がってくる。即ちガンマドヴァの演目構成にはより強い信仰性がみられ，他方の山伏神楽には割合的により強い娯楽性をみることができる。

歴史的資料を参考にすると[xxvi]，ガンマドヴァの場合，信仰的な神の踊りや悪魔の踊りあるいは様々な行事は，減少せず，現在でも行われているが，約100年ほど以前，演じられたパッチニ神に関する35の娯楽的な物語が現在では行われなくなった。その結果として現在のガンマドヴァは信仰性が目立つようになり，その形が変わった。しかし，山伏神楽に関する歴史的な資料[xxvii]あるいは現地調査から現れた情報によると，たしかに以前に比べて娯楽的な演目の数が減ったが，現在でも以前と同様に娯楽的な演目の数の方が圧倒的に多いので相対的に見るとそれほど形は変わっていない。(図12)

図12　ガンマドヴァと山伏神楽の演目の内容変化

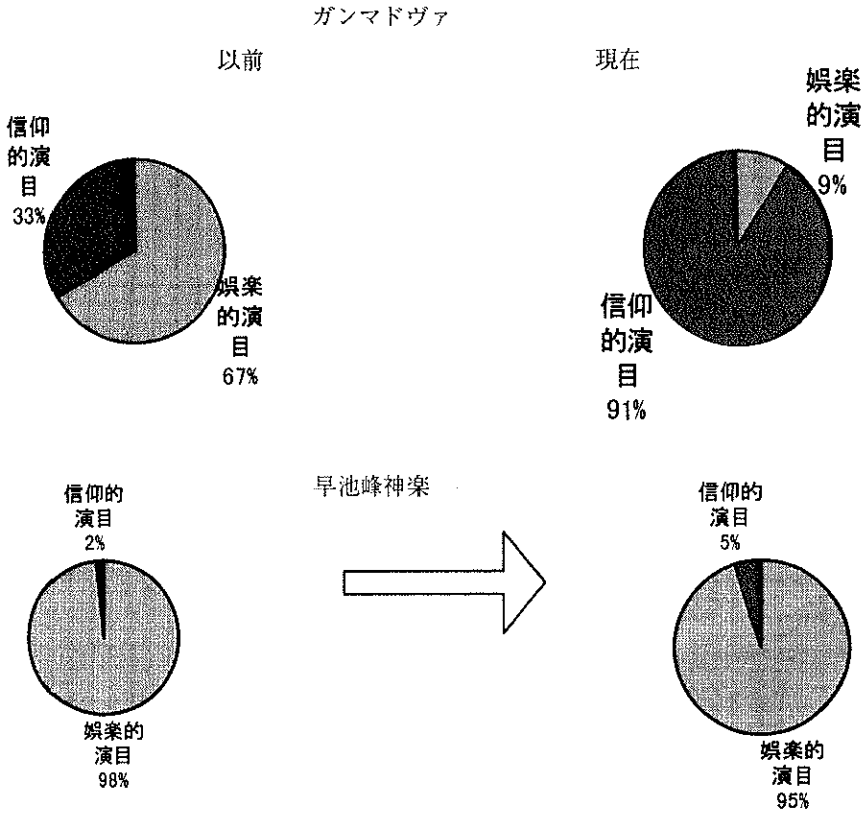


図12はガンマドヴァと山伏神楽が以前から現在にかけてそれらの演目の内容変化を示している。山伏神楽の場合は以前から現在にかけて娯楽的な演目の割合が信仰的な演目より圧倒的に多くみられる。しかし，ガンマドヴァの場合は，以前娯楽的な演目の割合が信仰的な演目より多かったが，現在に至ると非常に少なくなり，しかも信仰的な演目の割合が非常に多くなっている。

つまり，現在の山伏神楽は，形として大きな変化を示していないが，ガンマドヴァは娯楽的性格からより信仰的性格へと形を変化させているのである。

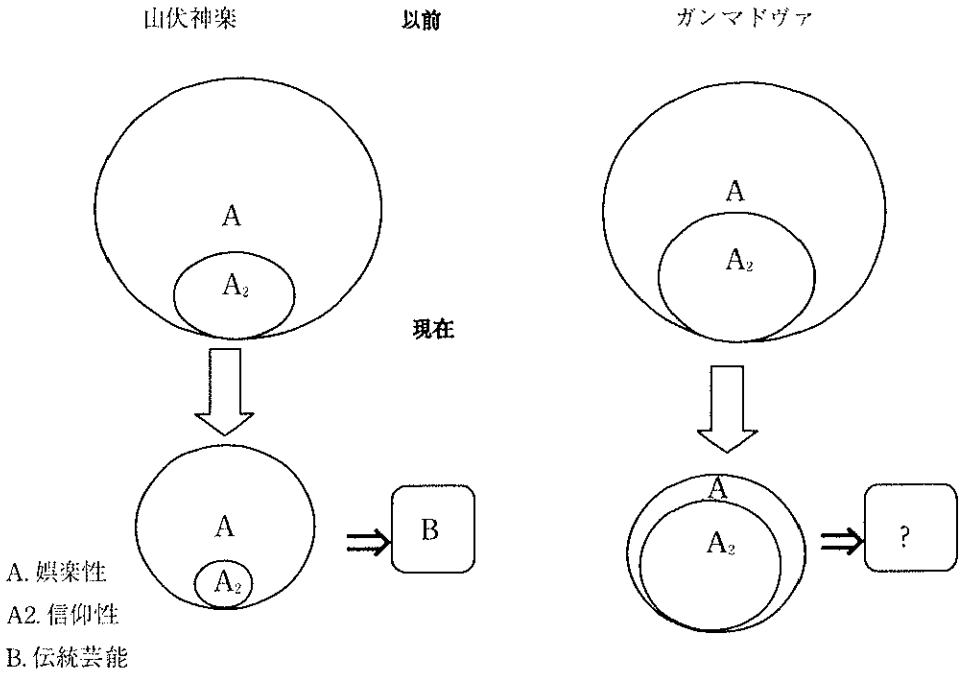
考察のまとめ

ガンマドヴァと山伏神楽は同じ民俗芸能だが，変化の様子及びその背景にある人々の意識，取り組みなどに大きな違いがみられる。日本人は神楽を伝統芸能という枠組とまた民俗芸能という姿で残そうとしている。例えば，地元以外の都会や外国ではイベントやショーとして娯楽を目的とする観客の前で行なわれる。地元では信仰を中心とした形で信仰心を持った観客の前で行なわれる。その取り組みには文化財保護，村落レベルの組織，経済的や教育的豊さなど多くの要素がみられる。早池峰神楽の形は大きく変化せず，存続している。ではガンマドヴァの場合はどうで

あろうか。

ガンマドヴァの場合にも村落レベルの組織や様々な性格などを見出すことはできる。しかし，両者を比較すれば，2つのより根本的な相違点を指摘しなければならない。そして，この2点は本論の課題である保存の問題に重要な含意を持つといえる。1点目はスリランカにおいてはガンマドヴァを伝統芸能として尊重する視野が欠如しているということである。山伏神楽が比較的形をとどめたまま存続してきた背景には国や地方公共団体の取り組みなどがあったが，その前提には山伏神楽を伝統芸能として捉えなおす意識がある。つまり，近代化と経済的な発展が逆に伝承への視点を持たせたと言うことである。言いかえれば，山伏神楽は伝統芸能の保存というある種の社会的制度の中で対象化されたために形を残すことができたということである。この点ガンマドヴァは伝統芸能として対象化されることはなく結果として形の変化が引き起こされている。両者の形の変化は図13のように表すことができるだろう。

図 13　ガンマドヴァと神楽の形における変容



ガンマドヴァを保存しようとするのであれば，それを伝統芸能として意識化し，対象化するような制度的条件が不可欠である。しかしこれには植民地支配以降の自国の文化を卑下するような態度（それはスリランカにおける“洗練された”スタイルである）が，大きな障害となる。つまり単にガンマドヴァを文化財として指定し，資金援助をすれば良いと言った小手先の政策で解決する問題ではなく，今日のスリランカにおける自国文化全体の再評価の中でこそガンマドヴァの

形は保存されていくのではないか。

2点目は，保存の意味そのものを考えなおすことにつながっていくものである。ガンマドヴァはたしかに形に変化をきたしているが，人々の意識のうちには芸術とは別に信仰のために残り，しかも都市部ではその開催がむしろ増加しているという事実がある。つまり，山伏神楽の場合とは質が異なり人々の生活にとってガンマドヴァは必要であると言う意味で形を変えながらも生き続けているのである。ここでは政策的な意味での保存あるいは人為的な保存とは別の視点が求められる。伝統芸能として対象化され保護されるわけでもなく，形も変化しているガンマドヴァが，それでも根強く人々の生活の中で存続している理由は何なのか。本論ではこの点は検討できないが，現代のスリランカの社会状況という広い背景の中で改めてこの点を考えることを課題としておきたい。

本論文は1999年度，筑波大学修士課程地域研究研究科に受理された修士論文を基に加筆，修正したものである。

参考資料

参考　1.　ガンマドヴァの演目

演目		内容
1	ヤハンセヘッラ	不明
2	ヴィシトルカタワ	不明
3	マドプラヤ	不明
4	パハンゲブラ	七人の仏陀の時代に生まれ，将来仏陀になるためにそれぞれの仏陀から許可をもらったこと，又パッティニの前世の美しさと豊かさに関する話。
5	ダンカティナ	不明
6	パーンディナルア	パーンディ市と王の美しさ，サンスクリット語の歌に現われる大神の美しさや，天の不思議な美しさにたとえられる。
7	アマーラサヤ	この演目にもパーンディ王のマンションと市の美しさを説明され，
8	パタハ	湖を意味しているが内容は不明
9	ソリープラサーガタヤ	夫のパーラガを殺されたことに怒られたパッティニはマドラ市を燃やした後の様子ではないかと思われる。
10	パッティニペトマ	カクサンダ仏陀の時代に女王で生まれたパッティニは植えたマンゴきの実を仏陀に供え，来世金のマンゴとして生まれるように祈る話。

11	アパヴィダマナ	パッティニ神3種類の生まれに関するものがあり，(マンゴから，ナーガ王の涙から，青い蓮から) ここははインドのパーンヂ王の果樹園のマンゴ (アンバ) の実から生まれた話である。誰もこのマンゴを取れなかった話と，最後に老人の姿で現われる大神が弓でマンゴを取ることに成功する。しかし，その時飛び散った果汁にあたって王の目が見えなくなる。怒った王はマンゴを金の箱に入れカーベーリ川に流させる話。
12	ヒマラヤ ヴィストラヤ	川に流していくマンゴの実を通して周りのヒマラヤ山と森の美しさ
13	カヴェーリガガヂヤケリーマ	カーベーリ港で泳いでいたパーラガ (コーワラン) や他の人々の楽しさ
14	カリカールウパタ	
15	ガガベヂーマ	川を分けるという意味しているが内容は不明
16	ディヤケリカターヴァ	パーラガの不倫相手であるマータヴィとの初めての愛に関する話，二人でカーベーリ川泳いでいる様子とマータヴィを満足させるために全財産を使ったコーワランは，最後に困っている様子。
17	コーヴィルペーヴィーマ	パーラガの出産に関する話。パーラガの母は不毛なので108の寺に行き，最後にイーシュワラ神にお願いした結果パーラガが生まれた。パーラガの母は妊娠している頃から，パーラガが大人になり父の業務を習うこと
18	センドケリヤ	パーラガの子供の頃の様々な遊び
19	ルヴァンナルヴァ	不明
20	タパスガマナ	パーラガの老人になった両親がある日自分の頭に白髪一本を見つけ，家を出て，来世での良い生まれ変わり，あるいは輪廻から解放される努力するために森に行くこと。
21	マータヴィカターワ	パーラガの不倫であるマータヴィの前世に関する話。インドラ神は大神の妻ウウルワシーと恋愛になる。怒った大神はウウルワシーを人間の世界のある舞手の娘，チットラパテイ名として生まれ変わりをさせた。彼女が出産した子供はマータヴィで後，パーラガと恋愛になるまでの話。
22	ワリナダヤ	パッティニは仕える女カーリと主人を探し，カーベーリ港からマドラー市まで，とても苦しい状況に直面するにもかかわらず歩いて行く様子

23	カンヌランカターワ	東南アジアに有名なキンヌラーン物語だと考えられる。キンヌラーン妻を好きになり，キンヌラーン夫を王に殺された末，キンヌラーン妻の祈りにより，キンヌラーン夫を蘇らせたように，パーヂ王に殺されたコーワランを蘇らせようとするパッティニの祈りを背景とした演目なのではないかと考えられる。(資料不明)しかし,カンヌラーン市の美しさを演じる演目という考えもある。
24	ヴェーシマダマ	パーヂ王に殺されたコーワランの遺体が見つかった場所であるが,演目の説明の資料不明
25	パーラガメラヴィーマ	カンナギの足首飾りを売ろうとしたコーワランはその頃王の正妻の足首飾りが盗まれた泥棒と間違えられ,逮捕されて処刑されてしまった話。
26	マラーイペッドマ	コーワランの遺体を見て王の仕打ちに嘆き悲しんだカンナギは,自分の左の乳房を切り取り地面に叩きつけ，衝撃で街は崩壊し,王の命もうばわれ，その後，自分の超自然的力でコーワランをよせがえらせる様子。
27	ヴィッティヤ	パッティニはパーヂ王に自分の主人に起こされた不正を不平を言う。
28	ヴェディプージャーヴァ	王の仕打ちに嘆き悲しんだカンナギは自分の左の乳房を切り取り地面に叩きつけた。その衝撃で街は崩壊し，コーワランをよせがえらせた。パッティニの乳房の傷に薬を付けたウェッダ(全住民)の家族だけを燃えないようにしたパッティニに感謝を表すためにウェッダ達はパッティニに供え,燃えて汚れたマドラー市をきれいにする話。
29	ガジャバーカターワ	ガンマドヴァをスリランカに紹介したと思われる一つの話である。ガジャバーという王（時代不明）自分のニーラマハヨウダという大変大きい青い体と力のある仕える巨人を持っていた大きな棒で海に叩いてこの中央の水を開くと，その間からインドに行き，以前スリランカから逮捕されていた120000囚人，12000のタミールの囚人,又パッティニ信仰とガンマドヴァを持ってきたという話
30	ガナルワカターワ	不明
31	ゲワンパーナ	不明
32	トラグンネギーマ	若いパーラガはハンサムな体で馬ににのり道を走っている様子。それを目を離せなく見ている庶民の女性達の話し。
33	ラダサラナカラドンアワワーダ	結婚する時注目される生活方法を意味しているが，内容は不明

34	ドーケリカターワ	金のためにするゲームを意味しているが内容は不明
35	サットパッティニカターワ	パッティニ神は母のお腹から生まれないように祈っているという理由で，7回前世から以下に書かれている様々なものから生まれたといわれている。 1•イーシュヴァラ神の股から 2•マハネル（バス）花から 3•ナーガ王（蛇）の裂くから 4•露から 5•汽船から 6•炎から 7•マンゴから サットパッティニカターワという演目ではその不思議な出産を演じられる[xxviii]。

参考2 神楽の演目

式舞

鳥舞，翁舞・白翁の舞，三番そう・黒翁の舞，八幡舞，山の神舞，岩戸開

裏舞

四人鳥舞，松迎，裏三番・後追い三番，裏八幡，小山の神，岩戸開き・本開き，稲田姫

神舞

尊揃舞，水無月，天降り・天孫降臨，悪神退治，悪魔退治，男五穀舞・天熊人五穀，女五穀・天，五穀，三韓征伐・三韓，竜宮渡り・安産舞，天王・牛頭天王舞，五大龍・五体龍王，恵比寿舞

荒舞

注連切，普将・風，誦舞，竜天・竜殿舞，笹割舞・笹分け，おしき舞

侍もの

曽我兄弟，鞍馬・鞍馬天狗，木曽舞，八嶋・屋嶋

女舞

鐘巻・道成寺，橋掛，蕨折り，年寿，機織，汐汲・潮汲・塩汲，天女舞，苧環舞

狂言

狂言田植，猿引き，金掘り，しゅうと見参，釣り狂言，袖の沢，献上，品物，狐とり，鹿島，江戸見物，伊勢参り，土踏まずの大法印

権現舞

内容については神楽に関する参考文献（[xxix]）大迫町観光協会，1984，『早池峰神楽』川口印刷工業株式会社を参照のこと。

参考・3 『マナメ』(Maname) 演劇

Ediriweera Sarachchandra氏によって1952年に作られた『マナメ』と『シンハバーフ』?25演劇は，スリランカの最初の独自な演劇だと言われている。民俗芸能などが疎んじられ，西洋の演劇が人気になっていた時代にスリランカの民俗芸能，特にナーダガム(Nadagam)などから音楽や踊りのリズムを手掛かりに，マナメを作られたのである。

動機

サラッチャンドラによると，マナメを作る動機は日本である。スリランカの独自の演劇を作ろうとしていたサラッチャンドラは，そのための見本となりうるインドのサンスクリット演劇が3世紀頃消滅したが，その台本から想像すると，日本の能はサンスクリット演劇に共通するのではないかと考えた。

そのため，マナメ演劇の中にスリランカの民俗芸能と日本の能演劇の影響がみられる。サラッチャンドラの演劇がスリランカの民俗芸能の重要性を表している。

物語

マナメはジャタカ物語の一つである。インドのある地方の皇太子であるマナメは，インドのタクサラー大学を主席で卒業したため教授の娘を結婚させてもらった。実家に帰る途中，二人は森の中で先住民に会う。先住民の王様が皇太子に女王を置いて帰るように命令する。皇太子は，日常生活に必要な知識が少なく，先住民の王様と相談の上解決することができたのに，先住民の王と戦争になり，女王の持っていた刀で先住民の王が皇太子を殺す。森の中で一人になる女王はしかたがなく先住民の王の助けを請う。しかし，自分の夫が死んでから他の男の助けを願った女王は，悪い女として先住民の王に追い出される。

物語を選んだ方法

スリランカの民俗芸能で踊られる物語は，全てのシンハラ人に知られている物語である。日本の能も同様である。また観客も，物語ではなく演技のやり方を見物する。その理由からマナメを選んだのである。

マナメはジャタカ物語の一つであり，ナーダガム，コーラムなど民俗芸能においても行われた。またサラッチャンドラはこの物語を選んだきっかけは日本で見た黒澤明の羅生門という映画だといわれている。サラッチャンドラはジャタカ物語のマナメと今昔物語の羅生門の背景も検討している。

音楽

スリランカの民俗芸能から影響を受け，全ての演劇の会話は太鼓のリズムに合わせた歌である。太鼓，笛，ハーモニユム，バイオリン，手びらがねなどが主な楽器である。

登場人物

マナメの登場人物はナダガムやコーラムに合わせてナレーターに紹介された後，太鼓のリズムに合わせて登場する。能に影響を受け，物語の説明を語るグループも登場し，舞台の後ろ側に座り，歌う。サンスクリットの演劇にもあったものである。

舞台

マナメの舞台はスリランカの民俗芸能と同様に円形であり，見物人は丸く取り囲んで見るようになっているが，一般の会館で行われる場合が多い。

服装

マナメの登場人物の全てが古い時代なので伝統的な服装が使われており，仮面を使わずに顔に性格を表す色を付ける能の方法を使っている。

見方

コーラムやナーダガムに演じられるマナメ物語では，"女性は悪い"というインドやスリランカの昔のイメージを表している。しかし，サラッチャンドラのマナメ物語では，女性は黒澤明の『羅生門』という映画における女性と同様に見物人のを受けている[iv]。

参考文献

i Sarachchandra, E.R., 1968. *Sinhala Gemi Natakaya*. Colombo: Department of Cultural Affairs.

ii Knox, R. 1681, "An Historical Relation of Ceylon", *Ceylon Historical Journal*, vol.VI, 1956. Maharagama Saman Press.

iii Obeyesekere, G.1982, *Social Change and the Deities*: The Rise of Kataragama Cult in Modern Sri Lanka, Madras, New Era Publications.

iv Darmadasa, K.N.O, and Tundeniya, H.M.S, 1994. *Shinhala Deva Puranaya*. Colombo Government Press.

v Adikaram, E.W, 1946, *Early History Of Buddhism in Ceylon*, Colombo, Gunasena Press.

vi James, E.O.1959, *The cult of the mother goddess* ; An archaeological and documentary Study, New York : Barnes and Noble.

vii Dikshitar, V. R.& Ramachandra, 1939, *The Shilappadikaram*, London: Oxford University Press.

viii Adikaram, E.W, 1946, *Early History Of Buddhism in Ceylon*, Colombo,Gunasena Press.

ix *The Rajavaliya*, 1900. (a historical narrative of sinhalese Kings from Vijaya to Vimala Dhrma Surya II), ed.B. Gunasekara, Colombo Government Press.

x Nevill, H., 1888, "The story of kovalan", *Taprobanian,February*.

xi *Kojiki*. 1968. Philippi, Donald, translation. Tokyo:University of Tokyo Press.

xii *Kojiki*. 1968. Philippi, Donald, translation. Tokyo:University of Tokyo Press.

xiii 本田安次，1990.『日本の伝統芸能』 錦正社

xiv 本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』 錦正社

xv 本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』 錦正社

xvi　久保田裕道，1999,『神楽の芸能民俗的研究』おうふう（株）

xvii　黒沼幸男・藤原一雄・上山丈人，（大迫観光協会）1984・『早池峰神楽』川口印刷

xviii　本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』　錦正社

xix　黒沼幸男・藤原一雄・上山丈人，（大迫観光協会）1984・『早池峰神楽』川口印刷

xx　本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』　錦正社

xxi　本田安次，1990.『翁そのほか』　錦正社

xxii　本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』　錦正社

xxiii　本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』　錦正社

xxiv　本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』　錦正社

xxv　Ariyapala, M. B,1956, Soociety in mediavil Ceylon, Colombo: Department of Cultural Affairs.

xxvi　Hevawasam,P.B.G,1974,　Pantis kolmurakavi,　Colombo: PradipaPrakasakayo

xxvii　本田安次，1942.『山伏神楽・番楽』　錦正社

写真　1．権現が墓参りする場面（黒森神楽）

写真　2．ガンマドヴァ祭り場を作っているところ

写真　3．トラナ

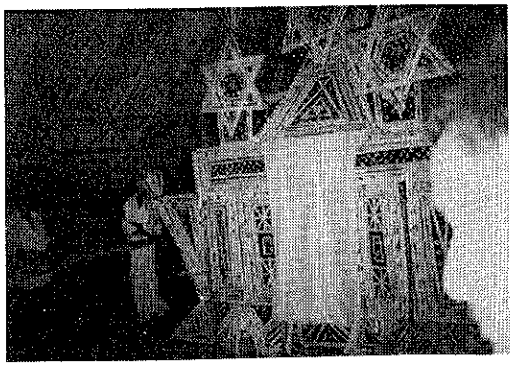


写真　4．カーラパンダムガサ

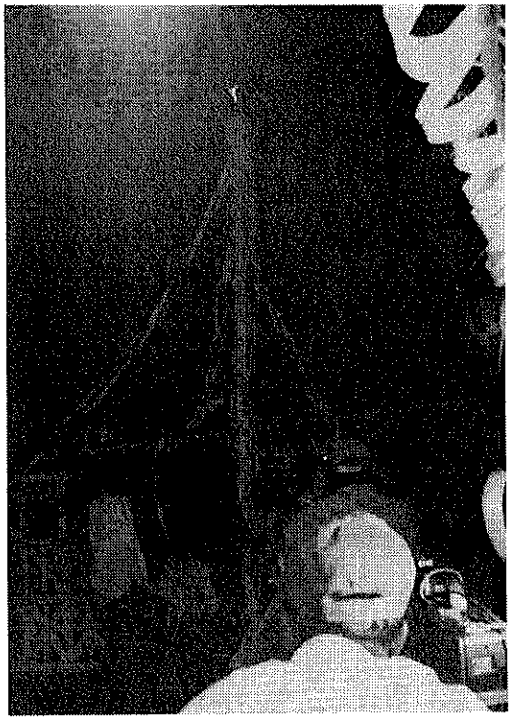


写真　5．マドア アラビーマ

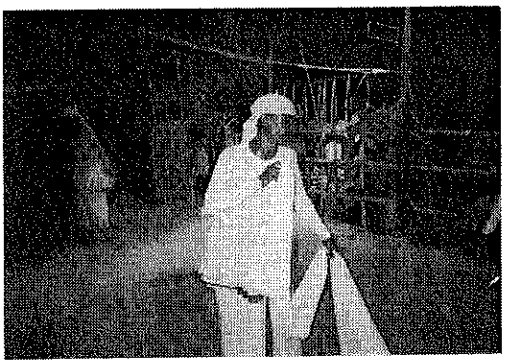


写真　6．マドヴァペーキリマ

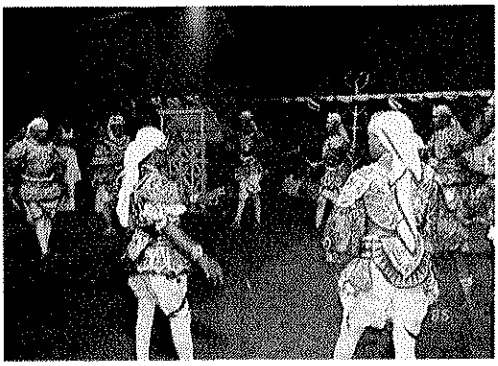


写真　7．ミッラケピーマ

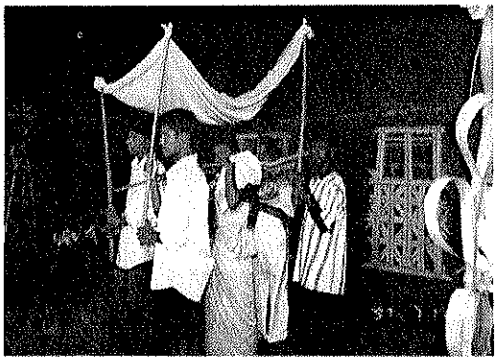


写真　8．トラナヤーガヤ

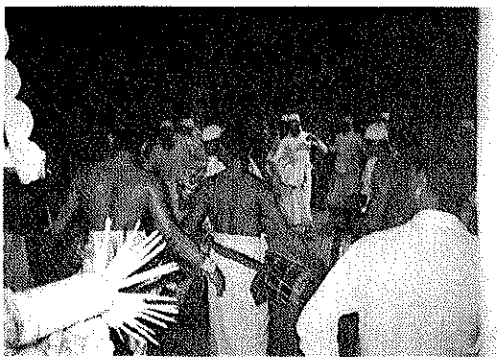


写真　9．サラバウェダマウィーマ

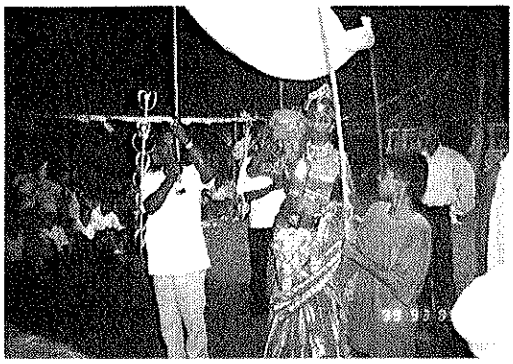


写真　10．テルメ舞

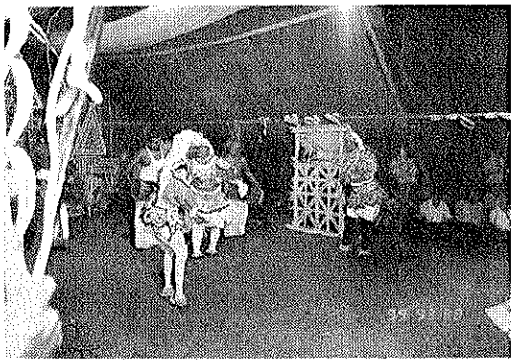


写真　11．ピヌムタラガ

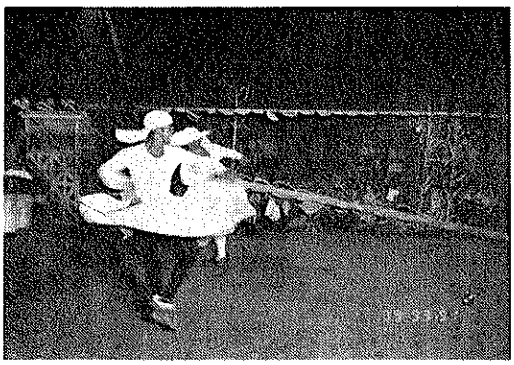


写真　12. ワーハラ舞

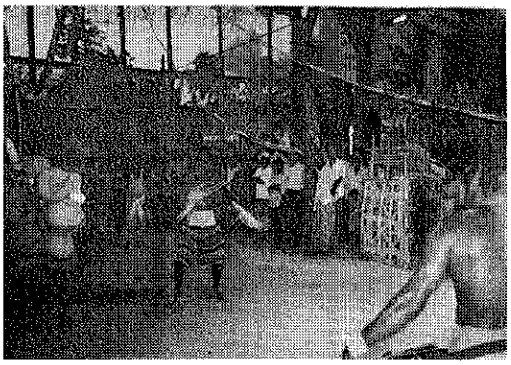


写真　13. マラーイペッドマ

写真　14. ギニペーギマ（デボル神舞）

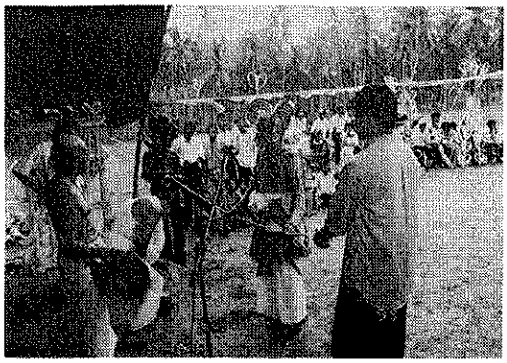


写真　15. キリイチラヴィーマ

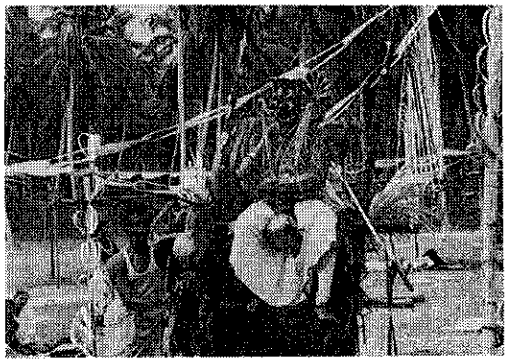


写真　16. ガラーヤクマ

写真　17. 神社の神楽殿での神楽

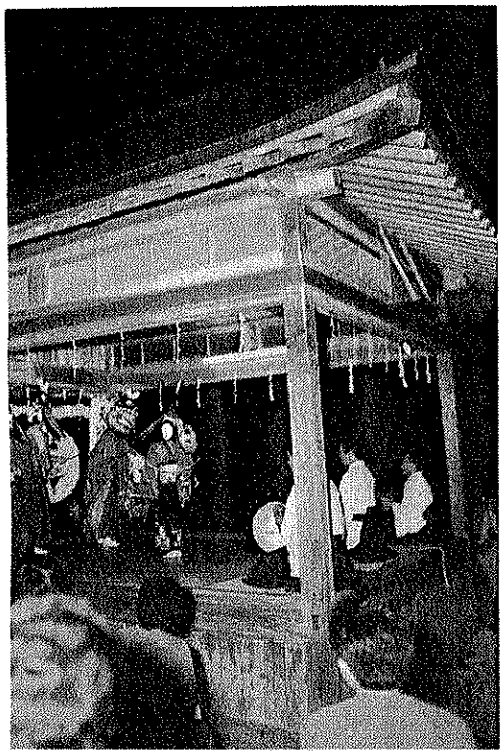


写真　18. 神社のホールでの神楽

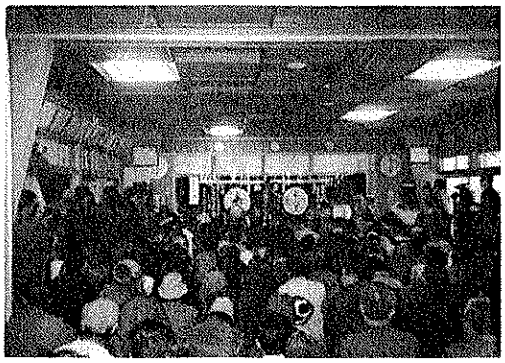


写真　19. 民家や神楽の館での神楽

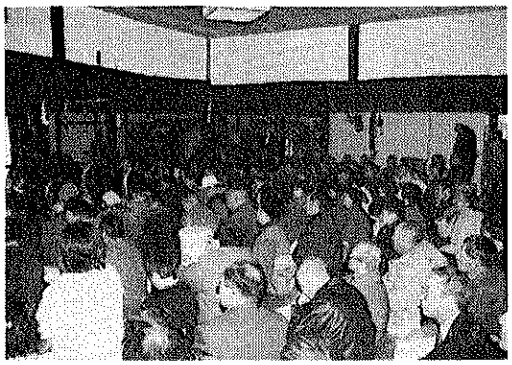


写真　20. 門打ち

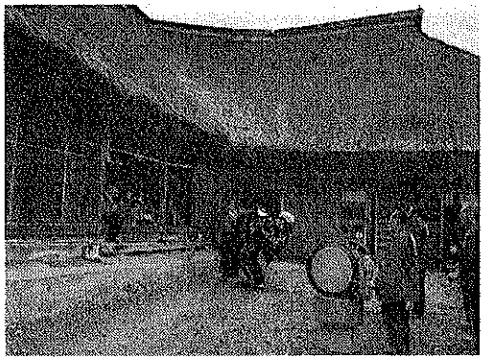


写真　21. 鳥舞

写真　22. 翁舞

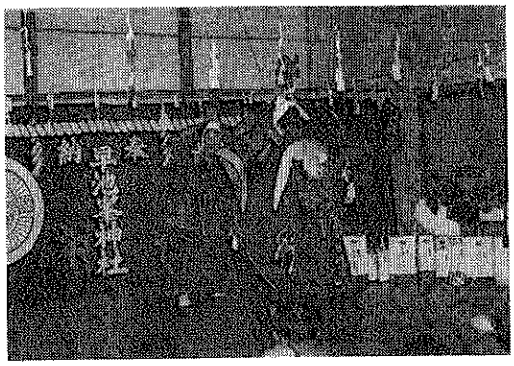


写真　23. 三番叟

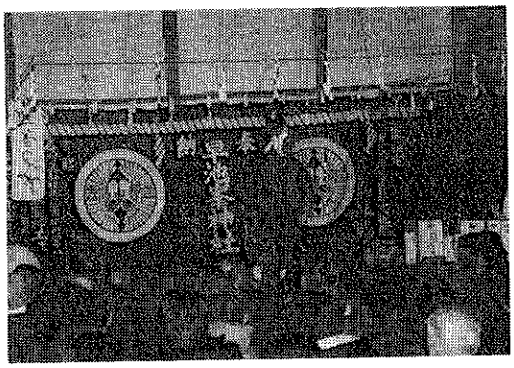


写真　24. 八幡舞

写真　25. 山の神舞

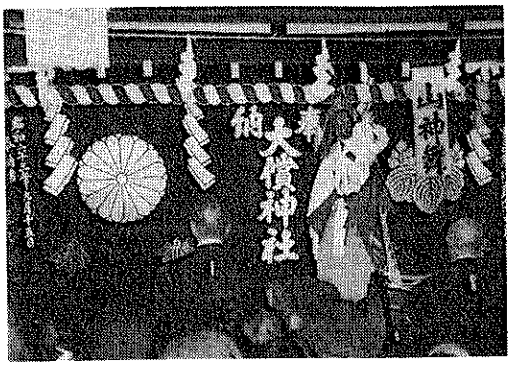


写真　26. 岩戸開き

写真　27. 松迎

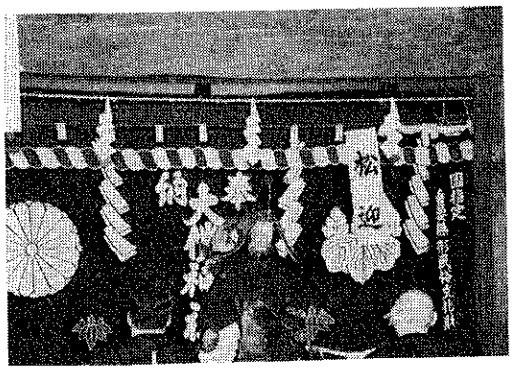


写真　28. 狂言

写真　29. 権現舞

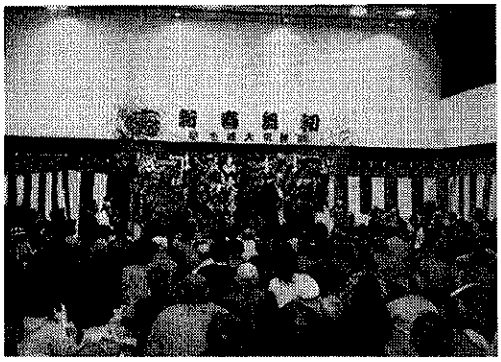


写真　30. 神楽楽器の例

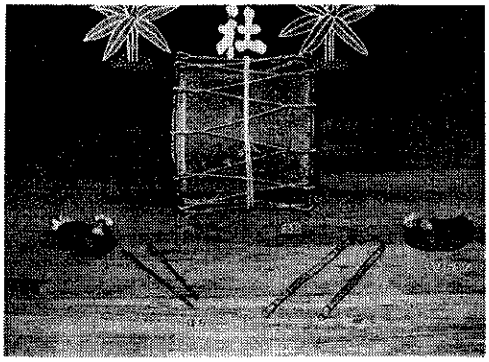


写真　31. 神楽の音楽　舞台の後から

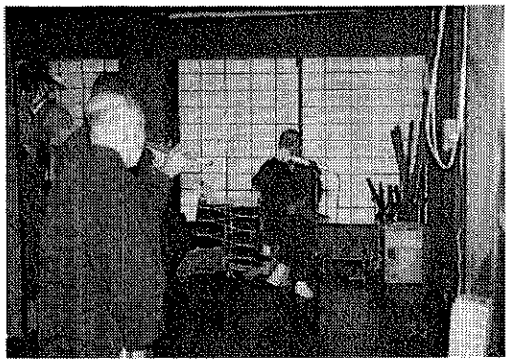


写真　32. ガンマドヴァの後継者

写真　33. 神楽（しんがく）の稽古

写真　34. 芸能発表会（岩手県北上市江釣子中学校）

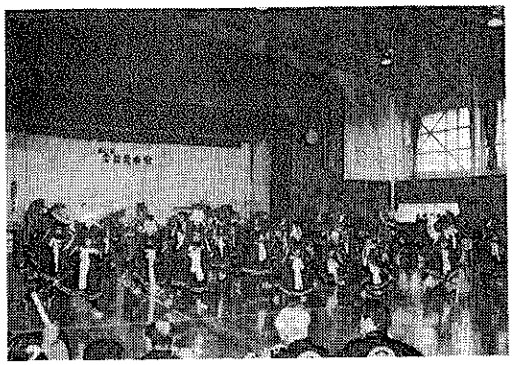


写真　35. 学生による弟子神楽

写真　36. 神楽を舞った学生にプレゼント

写真　37. 学生による神楽（しんがく）

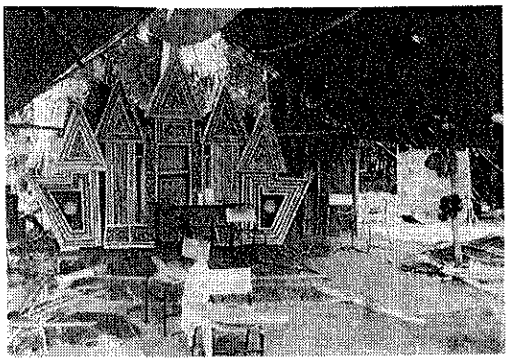
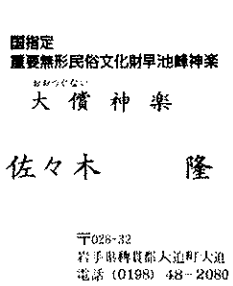


写真　38. 神楽関係者の名刺


国指定
重要無形民俗文化財早池峰神楽
大償神楽
佐々木　隆
〒026-32
岩手県釜石市大迫町大迫
電話（01998）48－2080